



SYNTHESIS 2009

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 2009



INDEX

1 研究所概要	01
2 研究所活動	07
大学公開講座	
月例研究報告会	
ランゲージ・ラウンジ活動報告	
3 研究プロジェクト	57
4 研究業績	71





研究所概要



研究所概要

研究所活動

研究プロジェクト

研究業績

2009年度 教養教育センター付属研究所概要

I. 組織

[研究所運営委員会執行部]

所長: 佐藤寧

主任: 高桑光徳 渡辺祐子

研究部門運営委員: 永野茂洋 大森洋子(2009年度サバティカル)

[研究所所員]

池上康夫 亀ヶ谷純一 川俣優 黒川貞生 佐藤アヤ子 嶋田彩司

鈴木義久 武光誠 花田宇秋 森田恭光 石渡周二 高木久夫 Varden, J. K. 原宏之

福山勝也 三角明子 猪瀬浩平 植木献 上野寛子 越智英輔 川島建太郎 北村文

金恩愛 金珍娥 Thornton, P. 張宏波 Mathis, M. (教養教育センター)

熊井茂行(国際学部) 寺田俊郎(法学部)

[研究所運営委員会(*=責任者)]

・公開講座 *佐藤寧 福山勝也 渡辺祐子 金恩愛

・SYNTHESIS(年報) *高桑光徳 黒川貞生 北村文

II. 研究活動

1. 研究プロジェクト(*=代表者)

・文化・文学における記憶の考察

*佐藤アヤ子 金恩愛 鶴殿博喜(経済学部)

・大学教育・研究活動における映像資料の活用

*原宏之 福山勝也

・アートを通じた新しい教養教育(リベラルアーツ)の探求

*猪瀬浩平 三角明子 植木献

・東アジアから見る日本のキリスト教

*渡辺祐子 永野茂洋

・中国語教育プログラムの改革に向けた基礎的調査研究

*張宏波 川俣優 竹中佐英子(本学非常勤講師)

・EFL(外国語としての英語)教育としての留学生科目(I群科目)の可能性

*北村文 *Thornton, P. 高松麻里(本学非常勤講師) 徳弘洋子(本学非常勤講師)



2. 研究報告会

≪6月10日(水)≫

・ Varden, J. K. 氏

「Loss of voice and the search for meaning:

日本語における母音の無声化と意味論・認知言語学的な意味素性データベースの研究」

・ 石渡周二氏

「Deanの軌跡—William D. Howellsをめぐる」

≪7月8日(水)≫

・ 上野寛子氏

「両生類の多様性と保全」

・ 川島建太郎氏

「1900年以降の自伝と写真—プルースト、ベンヤミン、ブリンクマン、バルト、ゼーバルト」

≪12月9日(水)≫

・ 原宏之氏

「フランスの研究情況、デモクラシーと教育(Ars Industrialisの活動から)」

・ 高木久夫氏

「哲学しすぎへの戒め—スピノザ宗教論の古風なよこがお」

≪1月13日(水)≫

・ 越智英輔氏

「筋運動が骨格筋および関節の機能に及ぼす効果とそのメカニズム」

・ 嶋田彩司氏

「神とソンガラス—18世紀日本のちいさな論争」

III. 教育活動

≪TOEIC IP試験≫(教養教育センターより委託業務)

・ 第1回試験 6月24日(水)横浜・6月27日(土)白金 計136名受験

・ 第2回試験 10月28日(水)横浜・白金 計133名受験

・ 第3回試験 12月16日(水)横浜・12月19日(土)白金 計142名受験

≪TOEIC講座≫

・ 試験対策講座 5月16日(土)～6月13日(土) 白金3・4限(全5回)
長谷川剛氏 計41名受講

・ 夏季集中特訓講座 8月4日(火)～8月12日(水) 白金2・3限(全7回)
長谷川剛氏 計20名受講

9月1日(火)～9月9日(水) 横浜2・3限(全7回)
中村道生氏 計17名受講

・秋季集中特訓講座 11月14日(土)～12月12日(土) 白金 土曜3・4限(全5回)
長谷川剛氏 計21名受講

・春季集中特訓講座 2月22日(月)～3月2日(火) 横浜2・3限(全7回)
中村道生氏 計16名受講

3月4日(木)～3月12日(金) 白金2・3限(全7回)
長谷川剛氏 計20名受講

《TOEFL ITP試験》(教養教育センターより委託業務)

・第1回試験 6月17日(水)横浜 計102名受験

・第2回試験 10月7日(水)横浜 計134名受験

《通年語学講座》

・DELE試験準備講座 4月8日(水)～白金 水曜5限
Eugenio del Prado氏 計32名受講

・ハングル能力検定試験対策講座

4月21日(火)～白金 火曜6限 李善姫氏 計37名受講

・ドイツ語検定講座 4月9日(木)～白金 木曜5限 小山田豊氏 計13名受講

・中国語コミュニケーション・検定試験講座(※09年度より新規開設)

4月8日(水)～横浜 水曜4限
森本美佐子氏、陳洲拳氏 計6名受講

《短期集中語学講座》

・DELE試験準備講座

文法・語彙編 8月31日(月)～9月4日(金)白金 仲道慎治氏 計36名受講

実践編 8月31日(月)～9月4日(金)白金 Eugenio del Prado氏 計28名受講

《手話講座》

3月15日(月)～3月19日(金)白金
荒木泉氏、長田静乃氏 計17名受講

IV. その他

《公開講演会》

・1月9日(土)『記憶の諸相』

報告者:岩崎稔氏、ディビット・チャリアンディー氏、

ムルハーン千栄子氏、佐藤アヤ子氏

コメンテーター:飛鳥壮太氏、茅野裕城子氏

《大学公開講座》

テーマ「時について考える」

・9月26日(土)『人生と時—都市、家族、そして地域社会の時間』

講演者:浅川達人氏



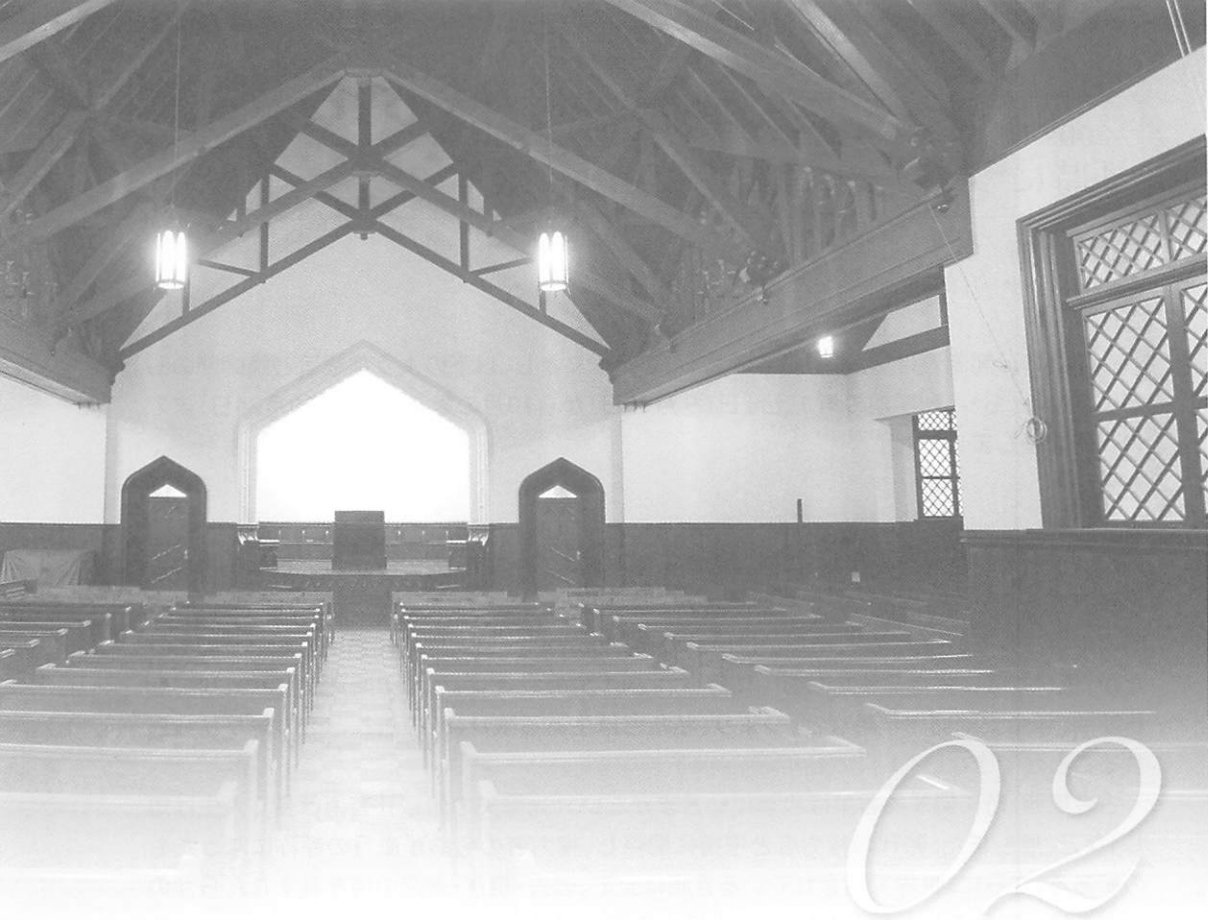
- ・ 10月3日(土)『宗教における「時」—コヘレトの時とイエスの時』
講演者:永野茂洋氏
- ・ 10月10日(土)『人体と時—加齢に伴う体力とからだの変化』
講演者:森田恭光氏
- ・ 10月17日(土)『体内時計の活用法』
講演者:柴田重信氏
- ・ 10月24日(土)『文学における「時」の描出—シェイクスピア劇の場合』
講演者:新谷忠彦氏

《イベント》

- ・ 6月1日(月)～6月5日(金) ¡Fiesta! Art on Campus '09 春
- ・ 12月1日(火)～12月21日(月) アジア文化祭

《刊行物》

- ・ 『よこはま茶話』(第10号) 7月刊行
- ・ 『明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 SYNTHESIS 2009』 3月刊行



02

研究所活動



研究所概要

研究所活動

研究プロジェクト

研究業績

2009年度明治学院大学秋学期公開講座報告 「時について考える」

佐藤 寧

教養教育センター附属研究所長

今年度の公開講座は「時について考える」をテーマとし、以下のような趣旨と講師陣のもとに、例年どおり、秋学期の第1土曜日(9月26日)から10月の第4土曜日(10月24日)までの5回開催しました。

趣旨

時は宇宙の誕生とともに生じ、宇宙のある限り続く。一方で、人のみが時の観念を持つことができるので、とくに文学や宗教において重要なテーマとなってきた。さらに、今日一般的に用いられている太陽暦、あるいは時計の存在が示すように、過去においてもそうであったが、現代社会に生きる私たちも時に縛られている。たとえば、列車の時刻、約束の日時、勤務時間、年金支給開始年齢など。つまり、私たちは生ある限り、時の流れとその縛りから逃れることができない。

古今東西、時に関する言葉は枚挙にいとまがない。「光陰矢の如し」「芸術は長く人生は短し」など。暦もまた、時代の権力者と密接に関係し、権力者の名前が年月の呼称になったものもある。さらに、世界で話されている言語は全て、過去・現在・未来の時を表すなんらかの形式を持っていることから推して、人と時との深い関係を知ることができる。

そこで今回の公開講座では、様々な視点から時の問題について考えてみたいと思います。

公開講座日程表(担当講師、講演題目)

- | | |
|----------------------------|------|
| 第1回(9月26日) 本学社会学部教授 | 浅川達人 |
| 『人生と時—都市、家族、そして地域社会の時間』 | |
| 第2回(10月3日) 本学教養教育センター教授 | 永野茂洋 |
| 『宗教における「時」—コヘレトの時とイエスの時』 | |
| 第3回(10月10日) 本学教養教育センター教授 | 森田恭光 |
| 『人体と時—加齢に伴う体力とからだの変化』 | |
| 第4回(10月17日) 早稲田大学教授 | 柴田重信 |
| 『体内時計の活用法』 | |
| 第5回(10月24日) 本学文学部教授 | 新谷忠彦 |
| 『文学における「時」の描出—シェイクスピア劇の場合』 | |

公開講座を振り返って

今回の公開講座には本学の学生を除いて、109名の応募者がありました。その内訳は男性61名(56%)、女性が48名(44%)です。しかし、実際に受講された方は103名で、詳しい内訳は次のようになります。



〈受講状況〉

●受講者数 103名

男性	女性	合計
57	46	103
55.3%	44.7%	100.0%

●受講者 住所

区内	市内	その他	合計
74	22	7	103
66.7%	19.8%	6.3%	100.0%

●受講者 年代別分布

20代以下	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	合計
1	1	4	11	38	43	5	103
1.0%	1.0%	3.9%	10.7%	36.9%	41.7%	4.9%	100.0%

●受講者 リピーター率

リピーター	新規	合計
79	24	103
76.7%	23.3%	100.0%

●出席状況

	①9月26日	②10月3日	③10月10日	④10月17日	⑤10月24日	平均
受講者数	88	86	89	87	87	87.4
出席率	85.4%	83.5%	86.4%	84.5%	84.5%	84.9%

昨年と比較すると、受講者が3名減ですが、昨年は102名の受講者がいわゆるリピーター(91.2%)でしたから、今回は新たに受講された方が多いことがわかります。

また、昨年と同様に自由記述で、今回の公開講座についての感想をお書きいただきました。ご回答くださった受講者に感謝いたします。「学問的側面や日常的側面などからのお話がきけ、楽しかったです」、「時を考えず日常過ごしているが、講義を受けて、何気ない事でも大切な時間であることを考え直しました」など、今回は概ね好評を頂き、主催者としても胸を撫で下ろしているところです。また、大変貴重なご批判やご意見等もあり、今後の公開講座に生かしていければと考えています。とくに、「1つのテーマを春・秋コースで充実した

講座は如何か」や「主催大学以外から専門家をもう少し多く招いても良いのではないか」は検討すべきご意見と思われます。

「今後どのような講座を希望されますか」との問いかけに、「歴史関係」「趣味的な内容のもの(遊具、ワインの歴史など)」「吾妻鏡」「『水』をテーマにしたもの」「文学」「キリスト教または聖書の講座」「『生』について」「自然環境」など、16もの希望するテーマをお書き頂きました。その中でも、「歴史関係」と「文学」を取上げて欲しいとの受講者が多くおりました。今後の参考にしたいと思います。

浅川 達人

社会学部

1. はじめに

「人生と時」というタイトルでの講演の依頼を受けた。40数年の人生経験しかない私には、もっと長い人生を生き抜いてきた聴衆の方々に対してお話するような人生訓などない。となれば、私の専門である都市社会学の知見から話を組み立てるしかないだろう。そう考え、「都市、家族、そして地域社会の時間」というサブタイトルを設定した。

私たちは、「都市の時間」と「家族の時間」、そしてそれら2種類の時間の関数として生じる「地域社会の時間」という3種類の時間の中を生きている。この3種類の時間軸で、私たちの人生を眺めてみると、私たちの身の回りに広がっている世界が、なぜそのような世界として秩序化されているのか理解することができるようになる。これが、今回の講演で私がお伝えしたかったメッセージの中核である。3種類の時間とはいったいどのようなものなのか。この3種類の時間軸を設定すると、なぜ、私たちの日常生活世界を理解することができるのか。以下で、少しずつ説明していきたい。

2. 社会学という視点

(1) 社会から人へ

社会学とはどのような学問か。「社会学者の数だけ社会学はある」などとうそぶいていても、社会学に初めて触れる方々には皆目見当もつかない。そこで私なりに定義しておきたい。「社会学とは、社会を紙に書く仕事である。」これが社会学についての私の定義である。こうお話しすると、たいがい怪訝な顔を向けられる。手で直接触れることもできないようなものを、紙に書くことなどできるものか、という反応である。それがそうでもない。社会を紙に書くことは可能なのだ。

「あなたが今着ている服は、どなたが選びましたか」と尋ねられたら、多くの方は、「自分で主体的に選択した」と答えるであろう。むろん、中には「妻が用意してくれた」とか、「親が用意してくれた」と答える方もいるであろう。しかしながら、妻や親の勧めに対して、それを受け入れるという選択は、少なくとも主体的にしているのである。このように考えると、私たちは日常生活世界において、主体的選択に基づいて生活しており、それが当然だと思っていることがわかる。

本当にそうだろうか。そのように疑問を感じることから、社会学はスタートする。自殺を例に挙げてみよう。自分の命を自ら絶つという行為は、まさに主体的に選び取られた行為であるかのようにみえる。では考えてみよう。ひとびとが主体的に自殺という行為を選んでいるのであれば、信仰や家族形態などとは無関係に自殺が起こるはずである。すなわち、カトリック教徒であろうがプロテスタントを信仰しているひとであろうが、単身者であろうが家族と一緒に暮らしているひとであろうが、おしなべて等しく自殺が起こるはずである。

実際に自殺率を調べたデュルケムという社会学者によれば、カトリック信者ではプロテスタント信者よりも自殺率が低く、家族と一緒に暮らしているひとの方が単身者よりも自

殺率が低いという。つまり、どのような集団に帰属して生活しているかということが、自殺という行為に影響をおよぼしている、ということになる。自殺という行為を主体的に選択していると見なすのではなく、自殺という行為を選ぶよう社会によって水路づけられているとみなした方が、自殺という事象をよりよく理解できるのである。これが、社会が人に対して影響をおよぼしているとみなす社会学のひとつの視点である。

(2) 人から社会へ

もうひとつの視点は、ひとびとの行為の積み重ねとして社会ができあがっているとみなす視点である。エレベーター内でのひとびとの振る舞いを例に挙げよう。たまたま乗り合わせた見ず知らずのひとに対して、「やあこんにちは。今日は寒いですね」などと挨拶を交わしたりは、日本では一般的にしない。多くのひとびとは、乗降口の上にあることが多い、エレベーターの現在位置を示す表示などを見つめ、互いに無関心を装う。なぜ、そのような行為をするのか。

エレベーター内では無関心を装うように、という教育を受けているわけではない。そのような規則があるわけでもない。欧米のホテルなどに滞在すると、見ず知らずの我々に対して笑顔で挨拶してくるひとびとも少なくない。にも関わらず、日本では、判で押したように互いに無関心を装うのはなぜか。エレベーター内では互いに無関心を装った方が過ごし易いと感じたひとびとが、互いに無関心を装うようになり、それが「当たり前のこと」となっていた。そう解釈すると理解しやすい。つまり、ひとびとの行為の積み重ねの結果として「当たり前のこと」を共有する社会ができあがっていることになる。これが、社会学のもうひとつの視点である。

これら2つの視点は、どちらがより有効であるかと議論すべきものではなく、両方が必要と考えるべきものである。ひとびとの行為の積み重ねが社会を形作り、社会の影響の下でひとびとの行為が積み重ねられる。その結果、社会にうねりや変化が与えられる、その影響を受けて人々の行為もまた変化していく。このように相互に作用し合っていると、社会学では考えるのである。

たしかに社会なるものに、直接手で触れることはできない。しかしながら、これまで述べてきたように、社会を紙に書くことはできるのである。私たちが暮らしている社会は、一見ばらばらで無秩序のように見えるかもしれないが、実はさまざまな秩序化がなされている。何が、なぜ、どのように秩序づけられているのかを調べ、考え、それを紙に書き他者に伝え、他者と議論する。というのが社会学の営みなのである。

(3) 時間の話に戻ろう

では、社会学の視点を使って、3種類の時間軸を整理してみよう。「都市の時間」とは都市という社会がもつ時間が、そこで暮らしているひとびとに影響をおよぼしているというこ

とを理解するための時間軸である。「家族の時間」とは、それぞれの家族の時間が積み重なって社会ができあがってくるということを理解するための時間軸である。そして、この2つの時間軸が重なったところに、「地域社会の時間」が生まれることになる。このような抽象的な話を繰り返していても理解できないので、具体的な事例を用いながら以下で説明してみたい。

3. ニュータウン開発と定住のパラドックス

定住のパラドックスという概念をご存知であろうか。慶応義塾大学教授の大江守之氏が提唱した概念であり、「定住が定住環境を悪化させる」というパラドックスである(大江 2003)。

仮想事例を用いて説明しよう。今、新規開発によって「A街」ができたとする。このA街に、住民のニーズにマッチするように“理想的に”学校や商店を建設したとする。ただし、このときの「住民」とは、このA街に定住することを志向する住民であり、したがってA街から転出する人は少なく、新規来住者もまた少ないこととする。このA街の30年後の姿を想像してほしい。

開発当初、児童の急激な増加によって小学校や中学校が必要とされる。しかしながら30年後、その子どもたちは成人となり離家することも多く、小中学校は遊休化する。開発当初、サンダル履きで買い物に出かけることができる近所の商店街の充実が熱望された。しかしながら30年後、少し離れた場所にできた大型ショッピングセンターに車で買い物に出かけることが増え、商店街がシャッター通りと化すようになる。開発当初、30歳前後だった住民は、誰もが等しく歳をとり、60歳前後となる。新規来住者が少ないため、高齢化率は上昇し続ける。

これが定住のパラドックスの典型例である。ほぼ同じ年齢、同じような家族構成の世帯が、新規に開発された住宅地に大量に流入し、一斉に定住を志向した場合、定住環境の悪化が起こりやすくなる。このことを、大江は「定住のパラドックス」という概念で説明したのである。

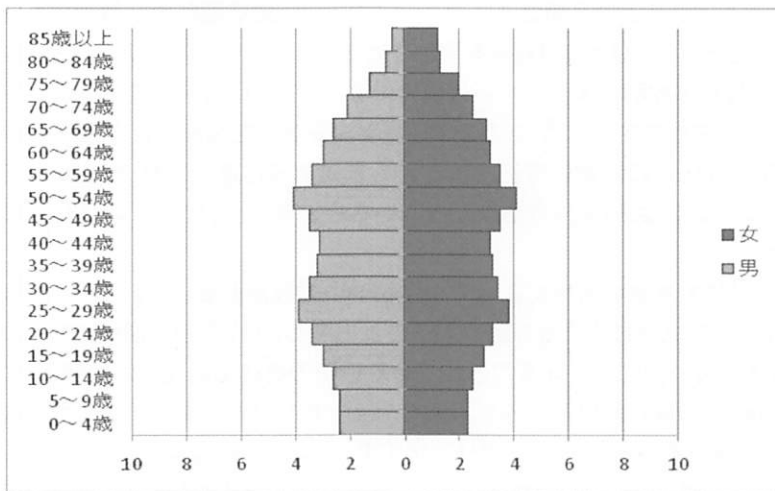
4. 大規模ニュータウンの誕生と現在

ほぼ同じ年齢、同じような家族構成の世帯が、新規に開発された住宅地に大量に流入し、一斉に定住を志向するというのは、あまりに極端な事例ではないのか。実際には、転居する住民も少なくないし、新規来住者も少なからず存在するであろう。となると、「定住のパラドックス」が予想するような事態は本当に起こるのであるか。このような疑問をもたれても不思議ではない。しかしながら、定住のパラドックスが予想する事態が、現実には起こっている地域社会は少なくないのである。

ほぼ同じ年齢、同じような家族構成の世帯が、新規に開発された住宅地に大量に流入するという現象を理解するためには、団塊の世代にあたるひとびとが、いつ、どこで、暮らし

ていたかを知る必要がある。団塊の世代とは1947年から1949年に生まれたひとびとをさす。2000年の国勢調査のデータを用いて作成した人口ピラミッド(図1)に示されている通り、団塊の世代を含む50～54歳は他の年齢階級と比べて男女ともに人口が多い。この団塊の世代の子ども世代が団塊ジュニアとよばれる世代であり、その人々を含む25～29歳が、団塊の世代に次いで人口が多いという特徴をもつ。

図1 人口ピラミッド(2000年)



(国勢調査データを用いて、筆者作成)

1960年代からの高度経済成長の余波にのった1970年。団塊の世代は20歳代前半にさしかかっており、就学・就業のチャンスを探求めて東京に流入することとなった。大江は、このとき全国の団塊の世代のおよそ30%弱が東京圏(東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県)で暮らしていた、と報告している(大江 1995)。また、倉沢・浅川は、1970年当時、東京大都市圏に流入した団塊の世代は、主に東京23区に集中して暮らしていたことを、主題図を用いて描き出している。1970年から1990年までを5年ごとに描き出した4枚の主題図を見ると、団塊の世代が郊外化していったことがよくわかる(倉沢・浅川 2004)。

このように、高度経済成長という「都市の時間」に導かれて、団塊の世代が東京大都市圏に流入してきた。流入したひとびとは、就学・就業の機会が集中する都心近くへの居住を志向する。しかしながら、大量に流入したひとびとを収容するだけの住宅を都心でまかなうことは困難であるため、郊外で大規模ニュータウンの建設が開始される。このように「都市の時間」という時間軸でみると、郊外における大規模ニュータウンの建設という事象を理解しやすくなる。

流入当初、都心近くへの居住を志向したひとびとも、結婚し、子どもを産み育てる頃になると、スペースや住環境を考慮して郊外へ転居することを志向するようになる。「家族の時間」という時間軸を導入すると、定住のパラドックスの前提となる、ほぼ同じ年齢、同じような家族構成の世帯が、新規に開発された住宅地に大量に流入するという事象の発生メカニズムを、理解できるようになる。

都心のオフィス街で働く男性が通勤電車によって郊外から運び去られている間、子育てや家事はもっぱら郊外のニュータウンに残された女性の役割として期待されることとなった。それだけではない。農村や里山を切り開いて造成した大規模ニュータウンには、開発当初は当然、小学校もなければ商店街もないのであり、それらの設立や誘致などの住民運動も、必然的に女性によって担われていったのである(玉野・浅川 2009)。このようにして、郊外で開発された大規模ニュータウンという地域社会に流れる時間は、「都市の時間」と「家族の時間」の関数として生じることとなったのである。

5. 終わりに

私たちは、「都市の時間」と「家族の時間」、そしてそれら2種類の時間の関数として生じる「地域社会の時間」という3種類の時間の中を生きている。この3種類の時間軸で、私たちの人生を眺めてみると、私たちの身の回りに広がっている世界が、なぜそのような世界として秩序化されているのか理解することができるようになる。そのことが少しでも理解いただけたのであれば、幸いである。

<参考文献>

- 浅川達人・玉野和志、2010、『現代都市とコミュニティ』放送大学教育振興会
大江守之、1995、「国内人口分布変動のコーホート分析」人口問題研究 vol. 51-3
大江守之、2003、「人口変動と都市・住宅政策」岡部光明(編)『総合政策学の最先端 I—市場・リスク・持続可能性』慶應大学出版会 pp.194-220
倉沢進・浅川達人(編)、2004、『新編東京圏の社会地図』東京大学出版会
玉野和志・浅川達人(編)、2009、『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院

宗教における時—コヘレトの時とイエスの時

永野 茂洋

教養教育センター

宗教と時

宗教は、それが本格的な宗教である場合には、必ずと言えるほど時について深く思いをひそめ、それを詩的に表現したり、また、概念的に考察して、その真理性を人々に伝える努力を払ってきました。仏教誕生の前提となったインドの「輪廻」の思想、中国儒教の招魂儀礼による血縁の永遠の連鎖への渴望と祖先崇拜など、時についての理解は宗教の中心だと言っても過言ではありません。それらは時計で計ることのできるような、過去から未来へ流れる均質な時間とはまったく異なる、「時」についての非常に豊かな理解を人類にもたらしてきました。

古代イスラエルにおける「時」の理解は、主にヘブライ語で書かれた旧約聖書とギリシア語で書かれた新約聖書に保存され、その後のいわゆるヨーロッパ文明の時間理解、歴史理解の土台の一つとなって行きます。そこには「創造」(時の始まり)や「終末」(時の終わり)のように、「時」についての非常に個性的で、独自の理解が展開されています。六日間働いて、七日目を「安息日」として休む、という「週」の考え方をこの世に初めてもたらしたのも古代イスラエルの人々でした。

抽象的な時間と充たされた時間

ヨーロッパ文明のもう一つの土台はギリシアです。わたしたち近代人の時間感覚は、過去・現在・未来が時間軸の上に、直線的に、順番に並んでいます。その基本は空間的な移動です。つまり運動した距離を時間軸に横倒ししたものを「時」とする捉え方です。これは古代ギリシア人がこの世にもたらしました。

ギリシアの時間理解は循環する時間が特徴であると言われますが、これは彼らが天体の空間上の運動距離を時間に転用したことから来ています。この時間理解の特徴は、時間が客観的で量的に計測できるという点にあります。客観的というのは、たとえば、わたしがジョギングをしている1時間と、みなさんがここで講演を聴いている1時間は、時間としては同じだと考えるということです。時間の中身に関係なく、「時間そのもの」を考えているわけです。古代イスラエルの人たちは、そのような抽象的な時間というものを知りませんでした。

古代イスラエルの人たちにとって、時間は「質的」でした。つまり、時間はその時間がどういう時間かという時間の中身と切り離せませんでした。「中身の詰まった時間」、「充たされた時間」が古代イスラエルの時間理解の特徴です。

彼らにとっては、祭りがまさにそのような「充たされた時間」の代表的なものでした。祭りという神聖な「時」の中に入って行く、という感覚は、わたしたちの中にもまだ若干生きています。それは人間の時間というよりも、神の時間、最高に高揚した、日常とは異質の領域に入っていくという感覚です。

巡礼もそうです。旧約聖書の『詩編』84編には、エルサレムに巡礼を果たした、ある貧しい

農民がハレの時間に入った喜びと高揚が、「主の庭を慕ってわたしの魂は絶え入りそうです。あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです」と歌われています。祝祭(ハレ)と日常(ケ)との交替を通して、古代イスラエルの人たちは生活のリズムを形作っていました。祝祭の時間は言葉の十全な意味で唯一「充たされた時」でした。

「時」の歴史化と「安息日」

祭りにおける「充たされた時」の感覚は、元来非歴史的なものです。古代イスラエルの人々のユニークなところは、この祭りの時間の中身を単なる農耕儀礼から、民族の過去の歴史的出来事を記念し、想起する時間へと組み替えていった点にありました。出エジプトの出来事、シナイ山での律法授与の出来事、荒野での幕屋生活の出来事などが祭りの時間の中身になって行きました。そして、それらが後に線分上で繋げられて行くことによって、やがて創造から終末へと向かう「歴史」の認識を成立させて行きます。歴史意識の成立は、古代イスラエル文化が後の世界にもたらした大きな寄与の一つでした。古代イスラエル文化において、祝祭的な「時」の感覚と「歴史」の認識とが統合されて行きました。「ヤハウェの日」とか、「今日こそ主の御業の日」と言われる祝祭的な「時」が、まさに歴史的な「時」として将来に期待され、また、想起され、祝われたのでした。安息日も、そのような彼らの「歴史」のリズムを刻む特別な「充たされた時間」でした。

「安息日」の伝来

安息日の考え方が日本列島に伝来したのはキリシタン時代ですが、近代西洋文明の生活慣習の一つとして定着したのは、幕末から明治時代にかけて来日したプロテスタントの宣教師やお雇い外国人の影響によってでした。ちなみに、今年は横浜開港150年の年ですが、これは同時に、日本においてプロテスタントのキリスト教が宣教を開始して150年でもあるということで、キリスト教の世界でもいろいろな催しがなされています。1859年、明治学院の創設者であるヘボン博士夫妻が来日したのもこの年でした。宣教師たちは日曜日に礼拝を守りましたから、この年が日本への二回目の安息日の到来ということになります。

ただし、「キリスト教宣教150年」というのは、沖縄を無視した言い方で、実は1846年にベッテルハイムという宣教師が沖縄に来て、大変大きな働きをしています。163年前です。そういう意味で、「キリスト教宣教150年」というのは、日本のキリスト教の沖縄に対する鈍感さを示しているという意味で問題があります。

日本で最初に日曜日を休日としたのは、明治5年、兵学寮と軍医学寮においてだったと言われています。「耶蘇の暦」として批判のあった太陽暦を明治政府が採用したのは、その翌年の1873年(明治6年)、日曜日休日制の採用は1876年(明治9年)でした。太陽暦採用の表向きの理由は、従来 of 太陰暦に比べて精密、便利であるという技術的な理由でしたが、実際は、日本がこれから世界に門戸を開き、また欧米諸国と交渉して行くに当たって太陰暦で

は不都合が多いだろうという、宣教師フルベッキの進言を明治政府が採用したからでした。フルベッキもまた明治学院にとっては忘れてはならない恩人の一人です。

「安息日」と現在の「日曜日」

日曜日を休日とするという習慣は、現在では何の違和感もなく定着していますが、これも当初はキリスト教的な時間理解を背景とする慣習であるということが、かなりはっきりと意識されていました。フルベッキがこれらの採用に細心の注意を払って心を砕いた理由もそこにありました。「耶穌の暦」に対するアレルギー反応は、その後150年弱の間に私たちから急速に失われ、現在では日曜日は専ら世俗的な意味での労働者の休日になっています。17世紀のピューリタンたちは、日曜日のレクリエーションや散歩まで禁じました。その感覚から言えば、こんなに嘆かわしいことはない、ということになるかもしれません。

しかし、旧約聖書の安息日の規定を見ると、「奴隷、寄留者、外国人、そしてすべての家畜を休ませよ、仕事をさせてはいけない」と書いてあります。弱い立場にあるものの保護政策という社会的意図が、もともとの安息日の意図だったことがわかります。要するに、労働者の休日だったのです。現在と違うのは、自分が休むことへの関心ではなく、自分とは異なる境遇にある他者に関心のウェイトがあるという点です。

「六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなど、すべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである」(『出エジプト記』5:12-15)。

有名な十戒の中の言葉です。神によってこの日が特別に聖別され、祝福された祝祭の日であるということの中身は、ここでは、かつて自分たちもエジプトで奴隷であったという歴史を想起して、そしてそこから、いま自分の回りにいる奴隷のような弱い立場、境遇にある者のことへと想像力を広げ、連帯して行くことだということです。日曜日休日制という習慣の背後に、旧約聖書時代まで遡る、古代イスラエルの人々の「時」の感覚があることを知っておくことは、私たちが失ったものが何であるかを知る上で重要です。

「安息日」に対するイエスの批判

その後、イスラエルの人々は、外国勢力による支配占領下で、自分たちの民族のアイデンティティを守る必要から、安息日に仕事をしないという習慣を他民族との相違として強調して行きました。その結果、排外主義が強まって行くと同時に、安息日にはならないことが細かく規定され、その厳守が人々に課せられて行きました。旧約聖書外典の『第一マカ

ベア書』2:29以下には、安息日に戦うことを拒否して、兵士とその妻子、家畜が虐殺されたとのエピソードが記されています。「時」を守ることがもたらした悲劇でした。

新約聖書には、その日にはともかく何もしてはならないといった、安息日の硬直した機械的適用に対して(宗教はしばしばこういう姿に陥ります)、イエスが「安息日は人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」と批判したことが記されています(『マルコ福音書』2:23-28)。また、「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」とのイエスの批判を記しています(『マルコ福音書』3:1-6)。心して聞かなければならない言葉だと思えます。

クロノスとカイロス

古代イスラエルの人々は抽象的な時間というものを知りませんでした。量的な、過去から現在、未来へと流れる時間のことをギリシア語で「クロノス」といいますが、旧約聖書の人々はこの「クロノス」に相当する言葉を知りませんでした。彼らにとって時間は質的でした。ギリシア語で書かれた新約聖書では、この旧約以来の質的な時間を表すのに、「カイロス」という言葉を使いました。質的な時間がいわば凝縮されて、人間に決断を迫るような、そういう決定的な時が「カイロス」です。

『マルコ福音書』1:14-15には、洗礼者ヨハネが捉えられた後、イエスがガリラヤへ行き、そこで神の福音を宣べ伝えて、「時(カイロス)は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい、と言われた」、とあります。ヘブライ語で「時」は「エーツ」といいますが、これが「カイロス」に相当します。質的な「時」です。

『コヘレトの言葉』における「時」

旧約聖書の『コヘレトの言葉』に、「エーツ」を「生まれる時」から「平和の時」まで、全部で28種類並べて、数え挙げている箇所があります。「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」として、以下のような「時」が列挙されています。

生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

殺す時、癒す時

破壊する時、建てる時

泣く時、笑う時

嘆く時、踊る時

石を放つ時、石を集める時

抱擁のとき、抱擁を遠ざける時

求める時、失う時

保つ時、放つ時

裂く時、縫う時

黙する時、語る時

愛する時、憎む時

闘いの時、平和の時

(『コヘレトの言葉』3:1-8)

「時」は中身と切り離せません。常に特定の出来事と結びついています。出来事は「時」なしに考えられず、「時」は出来事なしには考えられません。したがって、「時」にはその出来事に応じて、何種類もの種類があるのです。ここでは、それが、それぞれ対立する28の「時」として数え上げられています。28は聖数7の4倍ということで、おそらくこの世の人生の「時」全体を象徴させようとしたのだらうと考えられています。人生の中に、否定的な「時」と、肯定的な「時」がある。これは読んで解説がいらなくらいよくわかります。旧約聖書の中でもっとも美しい詩文の一つと言われるほどリズムのある詩です。人生と社会のリズムです。その交替。そしてそれらの全体が、「いのち」の誕生の時から「平和」の時へと振動して行きます。過酷な支配と労働、戦争と災い、それに耐えて生きる人々の姿が浮かび上がるようです。

『コヘレトの言葉』が書かれた時代は暗い時代でした。歴史状況は閉塞して、変化は一切望めません。神が歴史を導いて国家を再興するとか、終末の審判をもたらすという期待を持つことができない、そういう状況です。歴史は止まっていて、この時代の出口がどこにあるのかわからない。そういう状況の中でこの書物は書かれています。旧約の中でも大変特異な書物で、神の啓示ありませんし、律法も出てきません。神は語りかけてこないし、いるのかも実感できない。列挙されたそれぞれの「時」も、もはや神を直接感じさせるようなものではなくなっています。むしろ、「時」が「時」自体としてそこにある、という理解です。「時」の中で、人々はもう神と出会うことがない。

しかし、これは、当時、神を振りかざして(私物化して)貧しい者を支配していた特権的な人々に対する強烈な批判でした。その点でイエスの批判に通じるものがあります。「死」の時においてすら、もはや人は神と出会うことはないと言います。

太陽の下、再びわたしは見た。

足の速いものが競争に、強いものが闘いに、必ずしも勝つとは言えない。

知恵があるからと言ってパンにありつくのでも

聡明だからと言って富を得るのでも

知識があるからと言って好意を持たれるのでもない。

時と機会はだれにも臨むが、人間がその時を知らないだけだ

魚が運悪く網にかかったり

鳥が罾にかかったりするように
人間も突然不運に見舞われ、罾にかかる。
（『コヘレトの言葉』9：11～12）

万事が万事すでに秩序づけられ、変革不能のように思える時代に、コヘレトは「神は解き
がたい謎であり、知ろうと思っても人間が神の道をすべて理解することはできない」と言
います。そこから、逆に、この時代にできる限りでの積極的な生き方をすると、コヘ
レトは勧めました。この時代にはこの時代の限界があるからです。

わたしは知った
人間にとってもっとも幸福なのは
喜び楽しんで一生を送ることだ、と
人はだれもが飲み食いし
その労苦によって満足するのは
神の賜物だ、と。
（『コヘレトの言葉』3：12-13）

さあ、喜んであなたのパンを食べ
気持ちよくあなたの酒を飲むがよい。
あなたの業を神は受け入れてくださる。
どのようなときも純白の衣を着て
頭には香油を絶やすな。
太陽の下、与えられたむなしい人生の日々
愛する妻と共に楽しく生きるがよい。
それが、太陽の下で労苦するあなたへの人生と労苦の報いなのだ。
何によらず手をつけたことは熱心にするがよい。
いつかは行かなければならないあの陰府には
仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだから。
（『コヘレトの言葉』9：7～10）

イエスの「時」

この閉塞した現在の「時」が、実は神の無償の恵みの現在であり、活かされてある「時」で
あることを大胆に宣言したのが、『マタイ福音書』6：25～34の有名なイエスの「山上の説教」
の一節です。

だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べものより大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養つてくださる。あなた方は、鳥よりも価値があるものではないか。あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからと言つて、寿命を延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾つてはいなかつた。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装つてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』、『何を飲もうか』、『何を着ようか』と言つて、思ひ悩むな。それはみな異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の労苦は、その日だけで充分である。(『マタイ福音書』6:25~34)

「明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の労苦は、その日だけで充分である」という、イエスに帰せられているこの言葉は、まさにコヘレトに通じる言葉です。『コヘレトの言葉』の「時」のとらえ方とイエスの「時」のとらえ方は時代こそ離れていますが、連続性があり、感覚的にはかなり近いと言えらると思ひます。

空の鳥、野の花としての生。これは無名の主体の生き方です。そのような人々に対する視点という点でも両者は共通しています。無名であるということは、権威や権力を求めないということです。これは、今日、「共生」ということが求められています、そういう時代をわたしたちが生きる上でのヒントでもあるでしょう。

この一瞬の「時」を内容と切り離さずに、かつ、恵みとして受けとめて生きる。これは、キリスト教とか聖書だけの専売特許ではなく、だれにでも当てはまる事柄ではないでしょうか。抽象的で客観的な時間にとらわれると、わたしたちは自分に固有の「時」を、つい人と比べて、どうだ、ああだ、ということになりがちです。現代では客観的時間なしに生きることは不可能ですが、しかし、同時に、自分に固有の、中身の詰まった、中身と切り離せない「時」の豊かさをわたしたちは神から賜物として授かっている。それらをすべて客観的な時間に譲り渡してしまうことの貧しさを、宗教の「時」は警告しているのです。

森田 恭光

教養教育センター

はじめに

今回講座の開催日が10月10日、旧来の体育の日に設定されたこともあり、このテーマを設定した。

体力に関しては、一般的に体力に自信がある、ないなどの表現がなされ、体力がある場合は、日常生活の活動を楽に行え、病気にかかりにくいなどの考えが存在し、漠然と捉えられている。体力のとらえ方は、これまでさまざまな立場から述べられているが、要約すると二つに分けられる。一つは、形態と機能でとらえられる体力、すなわち、健康診断で行われる身長、体重と機能検査。二つ目は、人と環境の関連から分けた行動体力と防衛体力。行動体力は、われわれが、外に向かって行動を発現、持続するなどの筋力や全身持久性に関する能力であり、防衛体力は、外の環境から受ける各種ストレスに対する耐性に関する能力を示す。今回は、行動体力について述べる。

近年、国内の平均寿命は著しく延びている。そして、高齢者も増加し老化による健康問題も大きくクローズアップされている。われわれが、各年代において個人の健康を維持し人生をより豊かに過ごすためには、各年代に応じた身体機能を保持しつつ生活における不自由さをなるべく生じないように知恵を絞ることが重要である。そのためには、加齢に伴う体力とからだの機能の変化を把握し、それぞれに応じた身体機能を維持向上させる活動を日々意識的に行なっていく必要がある。身体機能を保持していくためには、からだの機能として筋機能や呼吸循環機能の保持が重要な要素となる。

人の身体機能は20歳～30歳をピークにそれ以降低下傾向を示す。この成人以降の年齢変化を加齢とよび、この加齢に伴う機能の変化を老化と称す。高齢期における身体機能は、加齢に伴う日常生活活動の減少も加わり、筋機能や呼吸循環機能の低下が大きくなる場合も見受けられる。しかし、これまでの研究によれば適度な運動やトレーニングにより各機能低下を抑制あるいは延滞することが可能であるとされ、個々人の健康状況に応じた適度な運動やスポーツを日々実施することが進められている。

本講座は、運動生理学的観点から、加齢に伴うからだの変化として、主に筋機能や呼吸循環機能に関して低下の様相と、各機能の低下を抑制するトレーニング効果について解説し、老化現象を落胆せず個々人に応じたからだの手入れについて、これまで行われてきた研究を踏まえ安全に効果的に行える運動方法について考察する。

1. 加齢と体力

図1に、12歳～30歳までの体力と年齢の関係の現状を示した。男女ともに青年期前期に最高値を示し、18歳以降は低下の傾向を示している。この行動体力の低下は、予備能力の低下を促す。日常生活において予備能力の低下が出現しても、支障を自覚することはない。しかし、この状態が継続すると行動体力のみならず、防衛体力の低下や生理機能の低下を生じさせ、生活習慣病の始まりとなり、日常生活において健康維持が困難になる可能性が考

えられる。

体力は年齢とともに低下していくことはこれまでの研究で明確にされている。加齢にともなう体力の変化に関しては、図2に示したごとく、20歳の体力を基準としてみると各体力要素は、低下傾向がみられる。筋機能に関しては、握力、立ち幅跳び、垂直跳びともに低下しているが、低下の程度は握力に比較し、立ち幅跳びと垂直跳びの脚力に関する項目の低下が大きい。垂直跳びや立ち幅跳びは筋力のみならずスピードの要素も加わっている。では、筋力のみと比較ではどのような変化が見られるだろうか。

図3に上肢と下肢の静的筋力の年齢による変化を示した¹⁾。筋力も男女ともに上肢筋力に比較し下肢筋力の低下が大きい。低下率は上肢筋力が30歳を基準とした場合、約20%の低下、下肢筋力は約30%の低下を示している。この現象は加齢と日常生活における筋機能の使用状況が異なるためと思われる。老化は足からと言われるが、現代社会において交通機関が発達したことや座業がおおくなり下肢を使用する頻度が加齢とともに減少している様子を反映していると考えられる。

2. 加齢と筋機能

筋力は先に示した通り、加齢とともに低下し、80歳代までに20歳代の約60%まで低下する。この低下の要因は筋横断面積と筋線維の減少である(図4)²⁾。筋量の低下は50歳前後から低下の割合が大きくなる。筋組織においては、上腕二

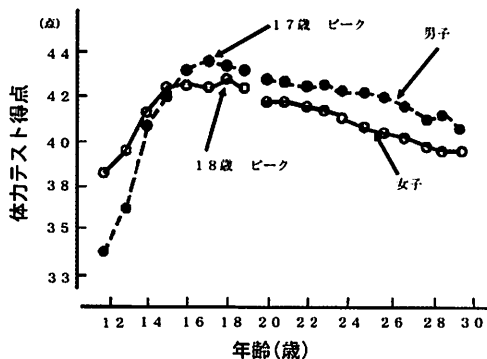


図1 文部科学省新体力テストの加齢による変化
実線が切れているのは体力測定の内容が変わるため

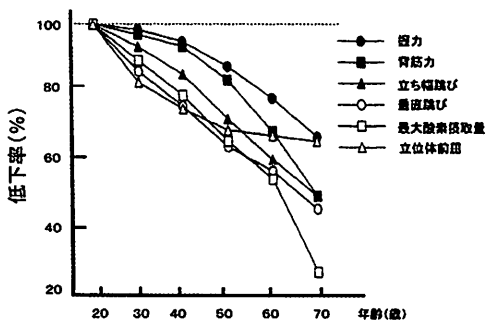


図2 加齢にともなう体力の変化

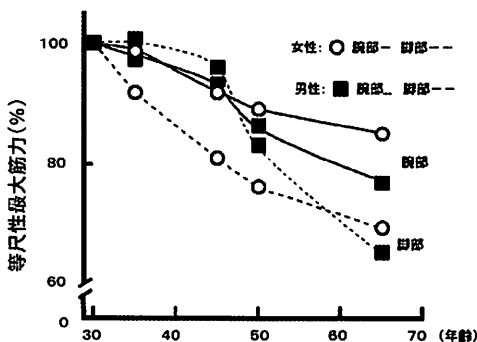


図3 等尺性最大筋力の年齢による推移¹⁾

頭筋、上腕三頭筋、大腿直筋、外側広筋、前脛骨筋などの筋で、筋委縮は収縮速度が遅い遅筋線維に比較し収縮速度が速い速筋線維が顕著である²⁾。筋線維数は25歳以降から緩やかに減少し始め、50歳以降、高齢になるほど減少率が大きくなる²⁾。このように、加齢にともなう筋力と垂直跳びなどのパワー系の低下は、加齢に伴う筋線維の委縮と線維数の減少により引き起こされている。

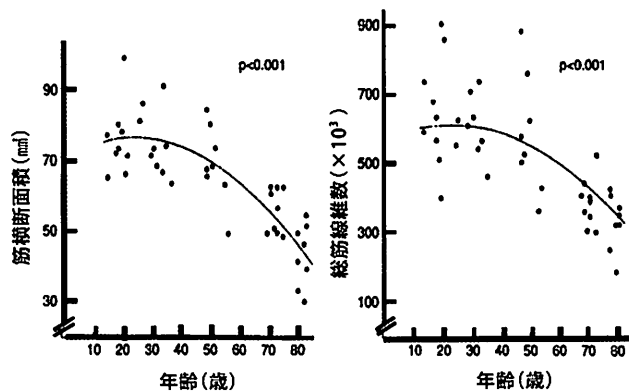


図4 外側広筋横断面積と筋線維数と年齢との関係²⁾

3. 筋委縮予防とトレーニング効果

加齢による筋力と筋量の低下について述べてきた。筋力向上に関してこれまでの研究結果から、青年期以降、継続的にトレーニングを実施している場合は、トレーニングを行っていないものと比較し、筋力レベルは高いが、トレーニングを継続しない場合は、加齢にともなう低下傾向は、行っていないものと同様であることが示されている³⁾。

高齢者が筋力トレーニングを行うと筋委縮および筋力の低下が軽減できるであろうか。

成人グループ(平均年齢29歳)

と高齢者グループ(平均年齢61歳)

を対象に、筋力、筋パワー向上を目的としたスクワットトレーニングを、週3日、10週間行った研究では、最大筋力が高齢者においても増加している。また、筋横断面積も、筋力と同様、トレーニング開始前と比較しトレーニング後、各筋とも増加を示した(図5、6)⁴⁾。

平均年齢68歳の高齢者に週2回、12週間、腕の筋力トレーニング

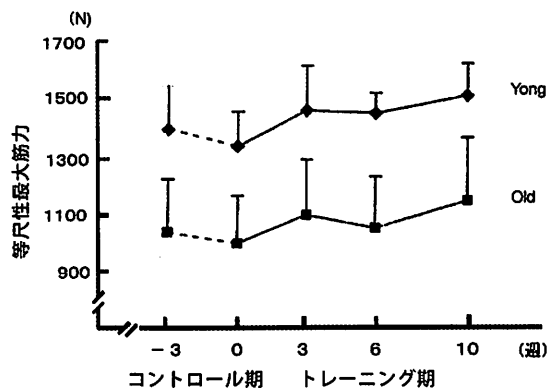


図5 等尺性膝最大筋力のトレーニングによる変化⁴⁾

グを行った研究においても、最大筋力がトレーニング前と比較しトレーニング後、23%~48%増加し、筋横断面積も14%増加したことが明確にされている⁵⁾。このように、高齢者においても筋を刺激するトレーニングを実施することにより、上肢と下肢ともに筋力や筋横断面積の増加を引き起こすトレーニング効果がえられるものと考えられる。

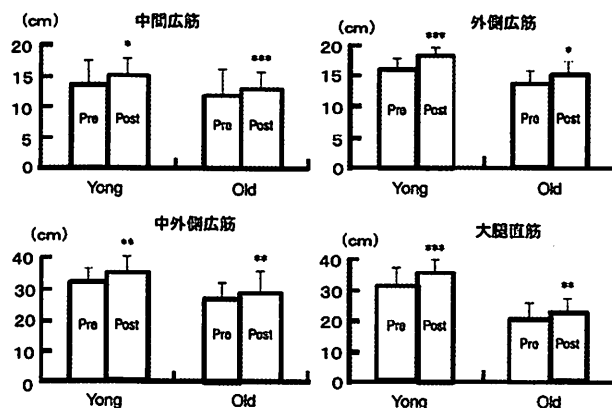


図6 10週間の筋力トレーニング前、後の筋横断面積⁴⁾

運動強度は、日常生活で使用している強度より、高めの強度で実施し、筋力トレーニングにからだに適応した場合は、比較的高強度で行うことが望まれる。種目は、腕立て伏せ、腹筋、背筋、スクワットを基本とし、各種目、動作と呼吸をあわせておこない、力まないで無理なく行うことが大切である。

高齢者においては、背伸び運動や立位姿勢による壁押し、椅子を利用したスクワット運動、椅子の座り立ち、座位によるレッグプレスなどが無理なくできる運動様式である。

4. 加齢と呼吸循環機能

呼吸循環機能の評価は、全身持久性の指標として最大酸素摂取量が用いられている。図2に示したごとく、最大酸素摂取量は加齢とともに直線的に減少する。最大酸素摂取量は、20歳代~70歳代において、10年間に5~15%低下する⁶⁾。この低下は、最大心拍数の低下の影響が大きい。加えて、加齢にともない血管から筋における酸素取り込み能力と酸素利用能力が低下することも影響している。また、加齢による筋量の低下も最大酸素摂取量を低下させる要因となる⁷⁾。このような生理的減少が生じるため、高齢になるとランニングなどの激しい運動に関しては、運動強度や運動量を維持できなくなる。よって、加齢に伴い運動強度や運動量を調節することが重要となる。

最大酸素摂取量は、加齢にともない低下するが最低水準を把握する必要がある。最低水準に関しては、日常生活において立ったり、座ったり、歩いたり、他者の手を借りることなく自分で行える能力を最低水準として考えることができる。高齢者が健康で活動的な生活を行うためには、最大酸素摂取量が体重当たり25ml/kg/min以上であることが望ましい。これ以下の場合は、活動する際に何らかの補助が必要となる。

5. 呼吸循環機能低下予防とトレーニング効果

図7に鍛錬者と非鍛錬者の加齢に伴う最大酸素摂取量の変化を示した⁶⁾。鍛錬者も非鍛錬者も加齢の影響により20歳代を基準とした場合、加齢に伴い最大酸素摂取量は直線的に低下する。しかし、同年代で比較すると鍛錬者が非鍛錬者より高い値を示している。このことは、持久性のトレーニングにより、予備能力が向上していると考えられる。最大酸素摂取量を各年代において高いレベルに維持するためには、中等度以上の運動強度で行うことが必要と考えられる。

先にも述べた通り、高齢者においてランニングなどの激しい運動はからだに対して高強度な運動であるため、日常生活において呼吸循環機能の予備能力を維持あるいは向上させるためには、歩行程度の運動が望ましい。その他の運動としては水中歩行や自転車エルゴメーターを用いた有酸素運動などがあげられる。

運動強度は最大酸素摂取量の40%~60%が望ましいとされている。心拍数の目安としては、下記の計算式により運動時の目標心拍数を算出する。

$$\text{目標心拍数} = (220 - \text{年齢} - \text{安静時心拍数}) \times 0.4 \sim 0.6 + \text{安静時心拍数}$$

日ごろ運動を行っていない場合は、40%を目安とし、運動を実施している場合は50%~60%を目安とする。この方法は、健康が良好な状態の時であり、医療機関を受診している場合は、専門医の指示に従うことが必要である。

歩行について厚生労働省は、1日8,000歩~10,000歩を目安として行うことを推奨している⁸⁾。高齢者の場合、日常生活において5,000歩程度しか歩いていない場合、8,000歩を実施することはかなりの負担となる。歩行開始時は、通常の生活において10分程度歩く時間を増やすことから開始し、徐々に歩く時間を増加し、歩行運動を習慣化することが重要である。

高齢者が寝たきりになる一要因として、転倒による骨折がある。歩行速度が遅いほど転倒回数は増加する⁹⁾。この歩行速度は脚筋力と関係する。加齢にともなう脚筋力の低下を軽減するためにも、歩行は重要な要素となる。歩行運動においては、歩幅を少し広くし、背筋を伸ばし、胸をはって少し早めに歩き、足は拇指球で踏み出し、踵から着地するように行うことも重要である。

我々は、コツコツと歩く習慣を身につけ、年をとるほど運動を行う努力をすることが健康寿命を延長させ充実した人生を送ることにつながるのではないだろうか。

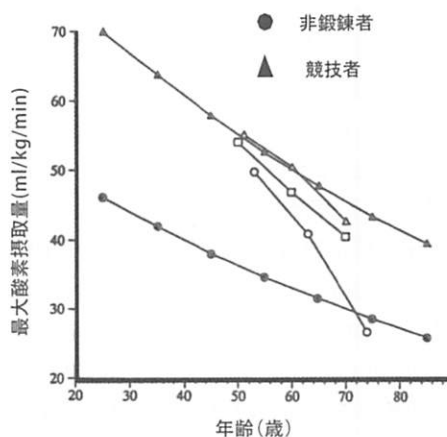


図7 非鍛錬者と競技者の年齢別の最大酸素摂取量の推移⁶⁾

参考文献

1. Thompson LV : Effect of age and training on skeletal muscle physiology and Performance. *Phys Ther*, 74 71-81, 1994.
2. Lexell J, Taylor CC : What is the cause of the ageing atrophy? Total number, Size and proportion of different fiber types studied in whole vastus lateralis muscle from 15-to 83-year-old men. *J Neurol Sci*, 84 275-294, 1988.
3. 森丘保典:東京オリンピック記念体力測定—第8回報告—.平成8年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告, No IX, 42-46, 1996.
4. Hakkinen K : Changes in muscle morphology, electromyographic activity, and force production characteristics during progressive strength training in young-and old men. *J Gerontol*, 53A B415-B423, 1998.
5. Roman,W : Adaptations in the elbow flexors of elderly males after heavy resistance training. *J. Appl. Physiol*, 74 750-754, 1993.
6. 勝田茂:運動生理学20講, 第2版, 128-133, 朝倉書店, 2002.
7. Fleg, J. L : Role of muscle loss in the age-associated reduction in Vo₂max. *J. Appl. Physiol*. 65 1147-1151, 1988.
8. 田端泉:新しい運動基準・運動指針普及定着ガイドブック, 平成18年度 厚生労働省科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業, 平成19年.
9. 安藤進:図解老化のことを正しく知る本. 中軽出版, 64-76,2000.

2009年度明治学院大学秋学期公開講座報告

体内時計の活用法



柴田 重信

早稲田大学先進理工学研究科

はじめに

生活リズムを整えることの重要性が指摘されるが、このリズムとは何だろう。我々の身体には、約24.5時間の周期のリズムを刻む概日リズム(サーカディアンリズム)と呼ばれる体内時計が備わっている。このリズムの働きにより、睡眠-覚醒リズム、体温リズムあるいは血圧のリズムなどが1日のうちで変動していることがわかる。また自分の体内時計と現地の昼夜が一致しないと時差ボケを感じることから、身体に体内時計があることがわかる。さらに早朝に生まれる子が多いことや、喘息発作が明け方に多いし、虚血性心疾患が朝方に多いことなども、体内時計に起因していることが知られている。このように体内時計は身体に1日のリズムを与えることにより、昼間は活動的に、夜間は安静的にさせる。まさに概日リズムに従った生活を実践することが生活リズムを整えることにつながる。体内時計の仕組みを知り、それをうまく活用し、健康な生活を送るヒントになることを期待する。(1)なぜ24時間ぴったりではなく、24.5時間で体内時計は刻むか?その結果1日の24時間に合わせる仕組みは?朝の光が体内時計を一時的に30分程度進めるので、1日の24時間に合わせること(リセットと呼ぶ)ができる。光の量や光の種類、その仕組みについて述べる。(2)体内時計を動かす時計遺伝子が1997年に見つかったが、最近の研究では、脳の中に親時計があり、全身に子時計があることがわかってきた。このことから、肝臓の時計は代謝に関わり、腸の時計は栄養の吸収に関わるかも知れないというふう考えられるようになってきた。(3)体内時計は朝日によってリセットされるが、最近の研究では規則正しい食事が体内時計をリセットすることがわかってきた。したがって、どのような食習慣が体内時計のリセットに関わるかを研究することで、時差ボケを軽減する食事などが期待できる。(4)薬を飲むときに、朝2錠で夕方1錠というように、必ずしも朝、昼、夕に同じ量の薬を飲むとは限らない。これは、薬の効果が服用する時刻で異なるために、主効果を最大にし、副作用を最少にする「時間薬理学」に基づく。同じように、栄養素も摂取する時間で異なる可能性があり、これは「時間栄養学」と呼ばれるようになった。つまり朝食と夕食では栄養素の働きが異なる可能性が考えられる。(5)体内時計の発生や発達さらに老化について考え、認知症や不眠症における体内時計の関与についても述べる。

1. 色々な周期のリズム

心臓の鼓動のリズムも、女性の「月経」のリズムも同じリズム現象で捉えることができる。このように生体には速いリズムから遅いリズムまで、多くのリズム現象で成り立っている。体内時計はこのような多くの生体リズムを司っているということになる。リズム現象は周期、振幅、位相で表現するが、まず周期を考えて分類する。周期が約90分の(A)ウルトラジアンリズムがある。この90分周期は睡眠によく見られる。睡眠はノンレム睡眠と呼ばれる深い睡眠で脳の睡眠と、レム睡眠と呼ばれる身体が休み、脳は夢を見る睡眠に2大別するが、この2つの睡眠がペアとなり約90分続く。したがって、6時間睡眠の人はこのリス

ムが4回起こり、7.5時間睡眠の人は5回起こることになる。次に(B)サーカディアンリズムがある。これはサーカ(およそ、概)、ディアン(日)リズムとなり、日本語で「概日リズム」と呼ぶ。つまり約1日を周期とするリズムで、体温リズム、副腎皮質ステロイドホルモン分泌リズム、睡眠・覚醒リズムなど、昼と夜で大きく変わる現象にはほとんどこの概日リズムが関わっていることになる。時計遺伝子などの働きがよくわかっているのはこのリズムであるので、後ほど詳しく解説する。したがって、狭義に体内時計といった場合には、このサーカディアンリズムを動かす時計のことを指している。(C)サーカルーナリズムで、約1月を周期とするリズムである。先に述べたように女性の月経周期や、潮の満ち引きがかかわる海産生物に見られる。さらに遅い周期で(D)サーカアニュアルリズムがあり、年周期のリズムである。生物では1年に一度開花するものや、動物では1年に一度繁殖期を迎えるものなどが知られている。人の場合年周期のリズムはあまり見られないが、季節によって変化する、例えば日照時間と関連して、冬季のうつ病が発症する「冬季うつ病」なども知られている。

2. サーカディアンリズム(概日リズム)と日内リズム

サーカディアンリズムを司る体内時計は約24時間周期で振動するリズムであり、人の場合約24.5時間である。リズム周期は動物種でも異なり、ハムスターの輪回しリズムは24時間より長い、一般にはマウスの輪回しリズムは24時間より短い。いずれにしても24時間には近いがぴったり24時間の生物は少ない。また24時間周期より大きくずれた20時間周期や36時間周期などのリズムは普通には見られない。人の場合24.5時間だとすると、地球の自転周期の24時間より0.5時間長いわけであるが、体内時計の針を毎日0.5時間進めていることになる。0.5時間進める働きをするのが朝日であるが、その仕組みについては後述する。したがって、地球上でお日様とともに生活していると24時間のリズムを刻むことになり、このリズムの周期は正確に24時間であり、「日内リズム、日周リズム」と呼ばれる。

地球上で暮らす我々はどのようにして24.5時間ではなく、24時間周期に合わせているのであろうか。このようにサーカディアンリズムを同調させ、日内リズムを刻ませる繰り返しの刺激を同調因子と呼び、明暗サイクル、食事サイクル、温度サイクルなどが重要な因子として知られている。

3. 主時計としての視交叉上核

脳の視床下部と呼ばれる場所の視神経が交差している直上に視交叉上核とばれる約1万個からなる神経集団(神経核とよぶ)がある。1972年にこの神経核を壊したネズミを作ると、この動物は睡眠・覚醒リズムが消失し、1日中起きたり寝たりを繰り返すことがわかった¹⁾。その後の研究で、ここの神経核が壊れると、体温リズム、副腎皮質ホルモン分泌リズムなどほとんどすべてのリズムが消失することから、ここが体内時計の中核だと同定された。

視交叉上核は視神経交差の真上にあることからわかるように、目から網膜を通して外界の明暗情報を受けとっていることがわかった。つまり、明暗サイクルの同調因子を視交叉上核が受け取り、毎日30分時計を前進させることにより、24時間に合わせているが、その仕組みは後述する。

4. 体内時計の3要素

体内時計は「周期」、「振幅」、「位相」という3要素で表現できる。周期はほとんどが24時間に近い周期であり、動物種によってあるいは系統によって異なる。ちなみにマウスではBalb/Cは短く、C57blackは長い。また、種々の時計遺伝子変異マウスが作成されているが、フェノタイプとして現れやすいのは周期の変異である。振幅は小さいもの(ヒトの体温リズム)から大きいもの(血中メラトニンの昼夜差、コレステロール分解酵素の昼夜差)までさまざまある。一般的に昼夜差が大きい信号ほど昼夜のシグナルとして利用していると考えられる。リズムの位相の情報は重要である。一般的には視交叉上核の時計位相が基準となり、マウスの場合大脳皮質や肝臓などの時計遺伝子発現リズムの位相は数時間遅れている。現地時間の時計と自分の時計の位相がずれるといわゆる時差ぼけになる。

体内時計は図1に示すように「入力」「発振」「出力」という3要素でも表現できる(図1)。サーカディアンリズムを作り出す源が発振であり、この発振機構の解明が精力的に進められている。入力とはサーカディアンリズムを日内リズムにする(24時間周期にあわせる)ための信号である。同調入力とも呼ばれている。出力は体内時計の信号を種々の生理学的なリズム性変動に伝える仕組みを意味する。視交叉上核は室傍核に信号を伝え、それが下垂体前葉のACTH分泌につながり、その後副腎皮質からコルチゾール分泌の日内リズムをもたらす。ところで、出力を担う遺伝子群を時計制御下にあるという意味で、Clock controlled gene (CCG)と呼ぶ。

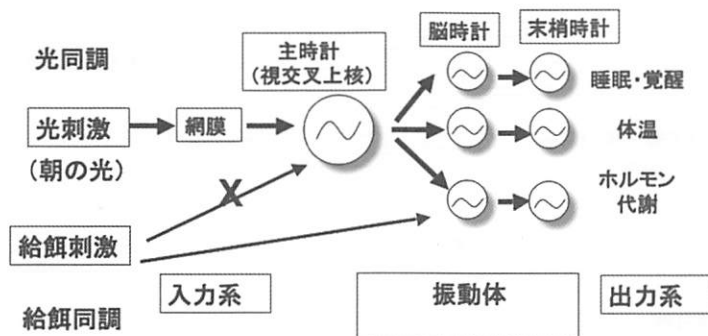


図1 体内時計の仕組みを表す模式図

5. 光同調の模式説明

図2には人を薄暗闇の中で生活させ、好きな時間に寝起きしてよいと指示すると、睡眠・覚醒リズムがフリーラン状態を示す。光を照射したときの体内時計の前進と後退を模式的に説明した図である。白塗りの横向きのバーを睡眠時間とする。縦軸が毎日の経日的変化とする。この人の睡眠の1日目は午後19時であるが、次の日は30分遅れるので、19:30分に睡眠開始が来る。これが続くと、白塗りのバー(主観的夜)の時間帯が右下がり遅れていくことがわかる。起きたら直ちに(この人にとっては朝、主観的夜の終わり)に光を照射するとその日に寝入る時間が1時間ほど進むことがわかった。その後また暗闇で過ごした後今度は寝入ってまもなく(主観的夜の始め)光を照射すると次の日の入眠開始時間が1時間ほど遅れることがわかった。さらにこの被験者の昼間に相当する時刻(主観的昼)に光照射を行っても次の日に入眠時刻は変化しなかった。つまり、起床時刻辺りの朝の光が人の体内時計の同調には重要であること、またコンビニエンスストアなどで夜間に強い光を浴びると体内時計を遅くする要因になることがわかった。すなわち、「早寝早起き朝ご飯」運動が展開されているが、朝の光を浴びるには早起きが重要となる。金、土、日と週末に夜間強い光を浴びかつ朝の体内時計前進時刻を過ぎても寝ていると、日ごとに体内時計は遅れ、休日明けの月曜日に通常時間に起こされると、一種の時差ぼけ状態となる危険性が大きくなる。高齢者が海外旅行に行くと、現地時間に合わせるための時計前進の大きさが小さいため、現地時間に合わせにくく時差ぼけになりやすい要因のひとつとなりうる。一般的に光の体内時計同調作用は光の照射時間と長さの積に比例する。また、光同調の波長特性が調べられており、480nm当たりの青緑光が強く、赤色光が弱いことが知られている。

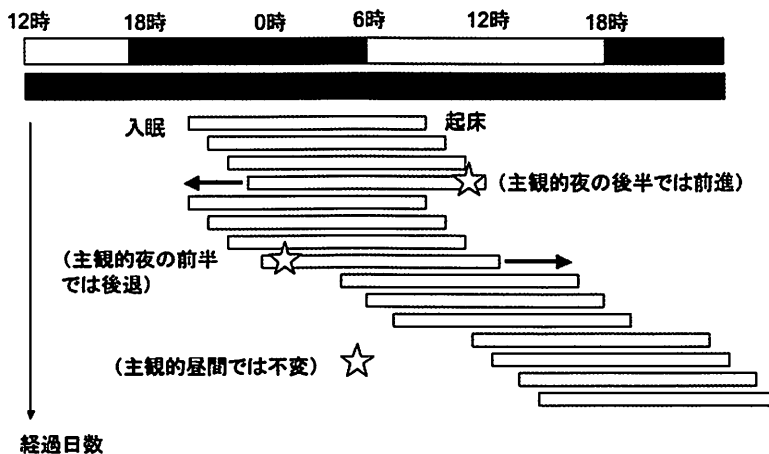


図2 光による位相前進と位相後退の模式図

6. 時計発振の分子機構

1997年に哺乳動物の時計遺伝子ClockとPer1が発見され²⁻³⁾、それを契機に数多くの時計遺伝子が発見された。体内時計の分子基盤の解明が急速に進んだ。Bmal1とClockが一緒になり、Per1遺伝子の発現を調節するところのスイッチを入れる。するとPer1遺伝子から核の外でPER1と呼ばれるタンパク質ができる。このタンパク質が十分にできると、Per1遺伝子発現調節のスイッチを切りに細胞の核内に入って行く。最終生産物が生産現場に向いて止めるような機構を「フィードバック制御」とよばれているが、時計の周期性もこの仕組みを利用している。このスイッチが入り、切れるまでに約24時間の時間を費やしていると考えられている。スイッチが入ってから切れるまでの時間が短ければ24時間より短い周期の時計となり、切れるまでの時間が長いと24時間より長い周期の時計となる。最近の研究では、脳の中に親時計があり、全身に子時計があることがわかってきた。このことから、肝臓の時計は代謝に関わり、腸の時計は栄養の吸収に関わるかも知れないというふうと考えられるようになってきた。

7. 体内時計は全身にある

時計遺伝子の発見でわかったこともうひとつのことは、体内時計が全身性にあるということである。Per1遺伝子は主時計のある視交叉上核に多く発現しかつ、サーカディアンリズムを示すことは容易に想像できるが、調べてみると、大脳皮質や海馬などの脳や心臓、肺、肝臓、腎臓、皮膚などほとんどあらゆる臓器に発現し、リズムを刻んでいることが明らかとなった。したがって現在体内時計は、階層構造をとったシステムとして機能していると考えられるようになった。オーケストラに例えると、視交叉上核が指揮者で(主時計)、大脳皮質や海馬などの脳(脳時計)や肝臓、心臓などの末梢臓器(末梢時計)にある時計がそれぞれの楽器のパートであり、演奏するタイミングを視交叉上核が指示しており、これでハーモニーが取れたオーケストラになっている(図1)。楽器が違うようにそれぞれの臓器の時計は固有の働きを有している可能性が高い。肝臓では、コレステロールや中性脂肪の合成に関わる酵素が体内時計の支配下にあり、それぞれの都合がよい時刻に合成を行っていると考えられている。また小腸の体内時計機構を調べた結果、グルコースの取り込みに関与するGlut4、Glut5遺伝子発現が日内リズムを示し、Per2変異動物ではリズムが消失することが分かった。視交叉上核がそれぞれの臓器にどのような信号で時刻の情報を伝えているかについては不明であるが、自律神経や内分泌ホルモンの可能性が指摘されている。

体内時計は朝日によってリセットされるが、最近の研究では規則正しい食事が体内時計をリセットすることがわかってきた。したがって、どのような食習慣が体内時計のリセットに関わるかを研究することで、時差ボケを軽減する食事などが期待できる。また、薬を飲むときに、朝2錠で夕方1錠というように、必ずしも朝、昼、夕に同じ量の薬を飲むとは限らない。これは、薬の効果が服用する時刻で異なるために、主効果を最大にし、副作用を最

少にする「時間薬理学」に基づく。同じように、栄養素も摂取する時間で異なる可能性があり、これは「時間栄養学」と呼ばれるようになった。つまり朝食と夕食では栄養素の働きが異なる可能性が考えられる(図3)。

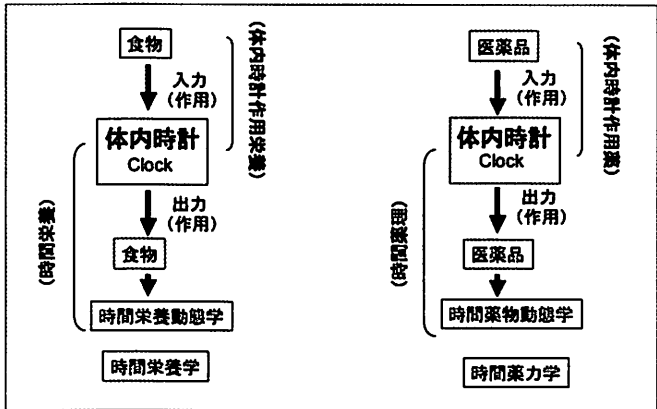


図3 体内時計と食物・栄養の相互関係

7. 給餌性予知行動リズムの特徴

正常なマウスを用いて、昼間の一定時刻に餌を与え(人でいえば、毎日夜食を取る)、予知行動が出現したマウスの時計遺伝子の発現リズムが調べられた。面白いことに、視交叉上核のPer1遺伝子発現は自由摂食マウスと、給餌制限マウスに差は認められなかったが、大脳皮質や肝臓では給餌時間に合わせた時刻に遺伝子発現のピークが動いていた。すなわち、餌と光を比較して、体内時計同調作用の強弱を考えると、視交叉上核以外の生体の時計は明暗環境のリズムではなく餌のリズムの方に引き寄せられることがわかった(図4)。

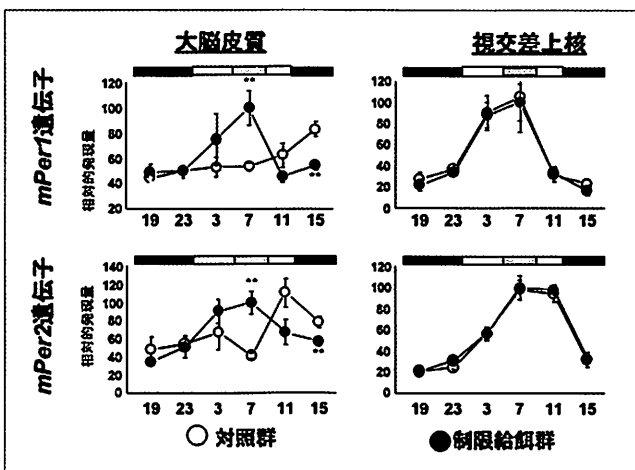


図4 マウスへの昼間の餌が視交叉上核や大脳皮質の時計遺伝子発現に及ぼす影響

肝臓では時計遺伝子の支配下にあるコレステロール合成酵素 (HMGCoA reductase) のリズムの位相も餌のリズムに合っていた。

日本からアメリカに行くとき(あるいはヨーロッパから日本に帰国するとき)は体内時計を前進させないといけませんが、人の場合サーカディアンリズム周期が24時間より長いために後退には有利でも前進には不利となり、時差ぼけを経験する人が多い。もともと体内時計は24時間より長いので遅れやすく、すなわち夜更かしには合いやすいが、早起きは短くしないといけなくて合わせにくいことに起因している。そこで、次に以下のような仮説を立てた実験をおこなった。ハワイに行くときに、ハワイ時間に合わせた食事をあらかじめ2~3日前より実践しておく(前倒しの食事時間になる)、実際ハワイに行ったとき時差ぼけ(睡眠障害)が少なく済むのではないかと考えた。ハワイでは現地の光が日本時間の早朝に当たることになり、体内時計の前進に有利に働いている。一方で、給餌性リズムをうまく使い視交叉上核以外の時計の位相を前進させるのである。その結果、前もっての現地時間に合わせた給餌はマウスの時計遺伝子発現リズムを非常によく前進させ、人の場合は特に高齢者で睡眠障害を軽減させることができた。

給餌性予知行動リズム形成により出来上がった時計は「腹時計」とも呼ばれるが、脳のどこに中枢があるかは議論があり、確定していない。またこの時計を形成させる食事の内容については不明であるが、ラットの実験では、炭水化物性の食事が消化吸收の面で勝るため、タンパク質や脂肪食より形成されやすいとの報告がある。また、サッカリンなどの非栄養性の嗜好物では形成できなかったとする報告もある。実際どのような仕組みでこのリズム形成が起こるのかについてはこれからの研究に期待される。

「早寝早起き朝ごはん」運動が展開されているが、「ブレイクファスト」すなわち、「絶食を破る」朝ごはんが食餌性の同調刺激としては強いと期待されることから、朝ごはんは体内時計のリズムの観点からも重要であると考えられる。逆に夜食を取る習慣が付いていると、そのことが体内時計を遅らせる要因となり、「遅寝遅起き夜食」の悪循環に陥る危険性をはらんでいる。これを断ち切るには兎に角、早起きし朝ごはんを食べる習慣をつけることである。図1に示すように、給餌刺激は視交叉上核以外の体内時計のリセットに重要な働きを示す。

8. 睡眠覚醒リズムの生後発達

一般的に、ヒトのサーカディアンリズムが生体機能に表出されるようになるのは出生後であると考えられている。実際に、生後4週目頃までは、数十分~3時間の周期で睡眠・覚醒を繰り返すウルトラディアンリズムが主に観察されるが、生後5週目を過ぎると、睡眠または覚醒の持続時間が長くなり、それらが徐々に集まりだして、生後2ヵ月あたりからは、昼間目覚めている時間が長くなり、夜は5~6時間眠るという日内リズムがあらわれてくる。生後6ヵ月頃からは、睡眠・覚醒リズムが外界の明暗変化等の環境サイクルにしっかり

と同調するようになり、母は子が夜に寝るようになったと感じるようである。ヒトの睡眠覚醒のサーカディアンリズムが生後に初めて出現することを考えると、胎生期には体内時計は機能しておらず、出生後に初めて形成されて働きはじめるのだろうか？ 実際、ヒト胎児の眼球運動、心拍数変動、体動、呼吸様運動などを超音波画像計測装置や心電測定計等で経時的に測定しても、24時間の周期成分はほとんど観察されず、数十分を1周期とするウルトラディアンリズムのみが観察される。しかしながら、以下に紹介する動物実験を用いた多くの研究は、すでに胎生期から体内時計が機能していることを示唆している。我々はPer1遺伝子の発現リズムが発生のどの段階で出現するのかをマウスを対象にして、*in situ hybridization*法で検討した結果、すでに胎生17日目の視交差上核では昼型の発現リズムを示し、体内時計の分子の実体である時計遺伝子は胎生期から機能し始めていることを明らかにした⁴⁾。一方、大脳皮質などの他の脳部位における時計遺伝子の発現リズムは離乳期以降に初めて出現する⁴⁾。メラトニン分泌リズムや自発行動リズムは生後に初めて表出されることを考えあわせると、出生後に様々な生体リズムが表れはじめるのは、視交差上核と他の脳部位や末梢組織間の神経連絡経路や液性因子を介した情報伝達経路が、出生後に徐々に形成され、視交差上核の体内時計が発する時刻情報が体内に多数存在するローカル時計に伝達され始めることに起因する可能性が高い。

9. 生体リズムの母子間同調

実際、夜行性のマウスなどでは、授乳などの母性行動は休息期の明期に集中しており、子は主に明期に栄養を摂取する必要に迫られる⁵⁾。発達期の体内時計は、外界、主に母から発せられる時刻情報を手掛かりにして、自身の位相を適切な時間に合わせておく(同調しておく)必要がある。この母による子のリズムの同調については、主にげっ歯類を対象にした研究が行われてきた。まず、「生みの親」あるいは「育ての親」のどちらが、子のリズム同調に重要なのか、ラットを対象にした母子交換実験により検討された。「生みの親」も「育ての親」も、その摂食行動等の生活リズムが子の体内時計を同調させているようである。さらに、「育ての親」による同調の程度は仔の数に反比例するため、母性行動の密度が同調の程度に重要であることが示唆されている。最近、我々は、子育てにおける体内時計の重要性を示唆する興味深い現象を見出した⁶⁾。すなわち、時計遺伝子の1つであるClock遺伝子に変異のあるClockホモ変異マウスでは、授乳行動などの母性行動のリズム性が消失しており、その結果、授乳を効率的に行うことができず、仔の体重が減少して生存率が低くなることを観察した。また、ヘテロ変異マウス同士の掛けあわせで生まれた野生型、ヘテロ型、ホモ型の仔は同じように発育することから、母のClock遺伝子が子育てには重要なことがわかる。このことは、ヒトにおいても母の生活リズムが子の発達に重要な影響を与えるという可能性を強く示唆するものである。

10. おわりに

生活リズムを整えることは、健康維持に重要であることはよく知られた事実であるが、時計遺伝子の発見以来そのことを説明するエビデンスが多く見つかって来ており、「生活リズム」を整えることの重要性がますます指摘される。実際時計遺伝子の変異が、癌の発症、メタボリック症状の助長、高血圧の原因の一つなどと言われてきており、未病の観点からも是非、体内時計の有効活用法を実践しよう。

文献

- (1) Stephan FK, Zucker I. (1972). Circadian rhythms in drinking behavior and locomotor activity of rats are eliminated by hypothalamic lesions. Proc Natl Acad Sci U S A. 69, 1583-1586.
- (2) King DP, Zhao Y, Sangoram AM, Wilsbacher LD, Tanaka M, Antoch MP, Steeves TD, Vitaterna MH, Kornhauser JM, Lowrey PL, Turek FW, Takahashi JS. (1997). Positional cloning of the mouse circadian clock gene. Cell. 89, 641-653.
- (3) Tei H, Okamura H, Shigeyoshi Y, Fukuhara C, Ozawa R, Hirose M, Sakaki Y. (1997). Circadian oscillation of a mammalian homologue of the *Drosophila* period gene. Nature. 389, 512-516.
- (4) Shimomura H, et al. Differential daily expression of *Per1* and *Per2* mRNA in the suprachiasmatic nucleus of fetal and early postnatal mice. Eur J Neurosci 2001; 13: 687-693.
- (5) Hoshino K, et al. Circadian Clock mutation in dams disrupts nursing behavior and growth of pups. Endocrinology 2006; 147:1916-23.

文学における「時」の描出—シェイクスピア劇の場合

新谷 忠彦

文学部

文学における「時」。考えてみれば、なんとも手強いテーマである。そもそも「時」の概念からして、古くから無数の考察の対象であったし、これからもありえるであろう、実に厄介な相手と言うほかない。よく引用される例だが、中世の偉大な神学者アウグスティヌスはその『告白』の中で、「いったい時間とは何でしょうか。だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです」と言っている。今回は、対象をイギリス最大の劇作家ウィリアム・シェイクスピア(1564-1616)に絞り、その作品群に見られる「時」の諸相を点描してみることにする。

シェイクスピアの作品に入る前に、ひとまず「時」を大雑把に分けてみれば次のようになるだろう。1. われわれの外にあって一つの方向に直線的に流れる外的、客観的、不可逆的時間。2. 外的時間の枠の中にある個人的に経験する内的時間。3. 現世的时间とそれを超越した永遠に連なる時間。4. 癒す者でもあれば破壊者でもある時間。5. 季節の変化、昼と夜、といった生のリズムとしての時間。

シェイクスピアは劇作家であると同時に詩人でもあり、その面での代表作に『ソネット集』がある。その例えば第64番、いにしへの「時代のきらやかな建築が跡かたもなくなるのを」、また「栄華も崩れおちて、残骸となるを見るとき、／廃墟を前にして私は思いをいたすのだ、やがては、／時の神が訪れてわが愛する者を奪っていこうと」(高松雄一訳)と歌う。この破壊者としての「時」は、通常問題劇と呼ばれる、トロイ戦争を背景とした『トロイラスとクレシダ』に受け継がれ、「美貌も知恵も／高貴な生まれも、頑強な肉体も、功績も…／意地の悪い、中傷をこととする「時」の支配から逃れられない」(三神勲訳)と苦い調子で語られることになる。この感覚は、その後の悲劇時代へと流れていくものであり、それは、エリザベス女王の晩年がかもし出す終末論的意識の反映と見てとることができるかも知れない。

こうした「時」の破壊的側面がある一方で、癒す者としての「時」もシェイクスピアは描くことを忘れない。その創作歴の最後に作られた、和解と再生の劇四篇の一つ『冬の夜ばなし』はその著しい例であろう。この作品は二部構成ともいうべく、前半では故なく妻の不貞を疑ったシシリア王がついにはその妻を死に追いやり、加えて生まれたばかりの女の赤児を他国に捨てさせるが、その直後不貞の疑いが単なる虚妄でしかなかったことを知り、残りの一生を懺悔にささげることが誓う、といった悲劇が描かれる。後半は16年後の舞台。捨てられた赤児が16歳の美しい娘に成長し、父であるシシリア王と再会する。更には、死んだと思われていた王の妻が実は生きていたことが判明しその妻と王との再会と和解・許しがあり、それにより前半の悲劇が奇跡的に克服されることになる。この二部構造の前半と後半の中間にシェイクスピアは「時」のコーラスという劇中人物を登場させ、16年の時間の経過を語らせている。これは、前半の悲劇の癒しに満ちた結末という後半による克服が、「時」の力によるものであるという印象を強く与える、シェイクスピアの大胆な作劇術の一つと言えよう。

ここで喜劇の代表作の一つ『お気に召すまま』を見てみたい。『お気に召すまま』は、宮廷

から追放された公爵一行、非道な兄から逃れる弟、現公爵の冷たい扱いから逃れる女性、この三組の人間たちが森へ移動する。公爵一行はその森でいにしへの理想郷(アーケーディア)の住人さながらの生活を楽しみ、二人の若者は恋愛ごっこにいそしむ。最後は公爵は復権を果し、若者たちは結婚し、再び宮廷に戻ることになる。

これは劇構造の面から言うと日常(宮廷)―非日常(森)―日常(宮廷)となり、非日常の世界は、いにしへの理想郷と恋愛ゲームという非日常的「時」に支配されている。劇中の一人物も言っている、この森には「時計」はないと。こういった森の性格は、祝祭の場が持つリズムにも似て、不合理、混乱、遊びを通して、日常的生がもたらす精神の硬直からの解放をもたらすことになる。精神の解放とは再生の謂でもあり、非日常的経験は、あたかも季節の循環がもたらす再生にも似たリズムを生に与える契機ともなっているのである。

ところで上に挙げた『お気に召すまま』の中に「世界全体は一つの舞台。すべての男も女も唯の役者にすぎず、そしてその一生は赤ん坊から老年まで七つの幕になる」という台詞がある。これは神の創造物たる人間は神を観客として世界という舞台でそれぞれ役柄を演じる者、という古くからあった「世界劇場」という観念の反映である。ここで肝心なのは、人間は役者に似て与えられた時間が終われば世界という舞台から姿を消すべき運命にあるという考えであり、喜劇の場合はそれゆえにこそ、永遠と永遠に囲まれた一時の生の輝きのいとおしさが一層強調されるのである。そしてこの観念は後述する悲劇『マクベス』でより深い意味で捉えられることになるだろう。

シェイクスピアはその作品群を通して「時」のもたらす意味と作用を様々に描いているのだが、観客を前提とした演劇の場合観客の意識の操作という問題があり、この点で、悲劇『オセロー』は「時」の扱いによる観客操作の見事な例となっている。

ヴェニス of 將軍オセローは密かにデズデモーナという女性と結婚した翌日キプロス島へ派遣され、デズデモーナも別の船でその後を追う。キプロス島に到着そうそうオセローの耳に部下のイアーゴが、デズデモーナの不貞という偽りの話を吹き込む。その悪魔的ささやきの毒に侵されたオセローは、ついには不貞を信じ、デズデモーナを扼殺してしまうのである。驚くべきことは、デズデモーナの扼殺がキプロス島到着後二日目に行われるということであり、これはいかにも不合理ではないか。それが不合理と見えないとすれば、イアーゴの悪魔的誘惑の巧みさと、観客がオセローの圧倒的な激情の波に飲み込まれてしまうからでもあるが、しかしそれに加えて二人の夫婦関係が長い期間にわたると感じさせる台詞をとところどころにはめ込むという密かな仕掛けが隠されていることによる点が大きい。

つまり『オセロー』という作品には、舞台上に展開される「短い時間」と、台詞のレベルでの「長い時間」の「二重の時間」があり、それが観客の反応を巧みに操作して、展開される筋の不合理性を忘れさせるようになっているのである。

以上、シェイクスピア劇に見られる「時」の諸相の一端に触れてきたが、「時」の内面化が最も深く描かれているのは、『マクベス』で頂点を迎える円熟期の悲劇群においてであろう。

人間不信から人間存在の意味、無意味へと人間探求の道にすすむハムレットは、その過程で、自ら狂気を演じつつ、おのれに課された父王の復讐という課題に向かっていく。その復讐が成る第5幕の冒頭に登場してくるハムレットが、手にどくろを持って思いをめぐらす。かつての偉大な英雄アレギザンダー大王やジュリアス・シーザーも死しては土にかえり、その土は風穴やビール樽の口をふさぐ粘土と化してしまう運命にあったかもしれない。こうして永遠という時の相にまで思いが拡大された時ハムレットは初めて、それまでの狂気と演技に満ちた狂おしい内的時から解放され、次のように言うことができたのであった。「雀一羽落ちるにも、神の特別の思召しがある。今来るなら、あとでは来ない—後で来なければ、今来る—今でなくも、やがて後でやって来るだろう—肝心なのは覚悟だ」(三神黙訳)。来るものとは勿論死である。ここには、いかにあらがっても止めることのできない「時」の厳然たる歩みの前で佇むほかないハムレットがいる。「肝心なのは覚悟だ」という一言には、そうした「時」への洞察とその「時」を内面化しえた一人の主人公の静かな佇まいがある。人知を超えた「時」にびたりと身を寄せそれと同化した時、ハムレットの苦悩の旅は事実上終止符を打ったのであったかも知れない。そしてシェイクスピアはその『ハムレット』を超えて『リア王』においては、「時間の重圧に耐え」「熟することが第一」と、一層深い認識を書き留めることになる。

そして『マクベス』。魔女の予言により野心に火をつけられたマクベスとマクベス夫人が国王ダンカンを弑逆し、王位を篡奪するものの、結局はダンカンの息子たちに倒されて野心の空しさを悟ることになる。そのマクベスは、ダンカンを殺害した直後に、屋敷中に響き渡る「もう眠りはないぞ、／マクベスが眠りを殺したぞ」という声を聞く。眠りとは、「もつれた心労の糸玉を濃やかにほぐしてくれる／…昼間の生への安らぎの死の床…／心の傷の軟膏、…人生の饗宴の滋養の一皿—」(大場建治訳)であり、人間の生を支えるなくてはならないものである。野心という未来を先取りし、自然の時間に逆らう行為に及んだ結果は、「眠り」を殺してしまっただけのことであった。「眠り」を奪われたということは、「終り」もなければ「始まり」もない永遠の現在という地獄の暗闇にも等しい「時」を内的に生きることであろう。そしてこれは、後に夢遊病にかかるマクベス夫人にあっては、「目は開いているが」「なにも見えていない」昼と夜を同時に生きざるを得ない悪夢の「時」へと姿を変えていく。

野心から敗北へと時を先取りしつつ疾走するマクベスをシェイクスピアは「馬」のイメージで表現するのだが、その背後にあるのは、聖書の『ヨハネ黙示録』で最後の審判の時に出現する四頭の馬である。とすればマクベスの所業は、最初から終末論的意味を内包していたということにほかならない。

ここで一つ面白いのは、マクベス夫妻には子供がないということが劇中語られている点である。マクベスを最終的に倒すのはマクダフという人物であるが、そのマクダフは自分のことを、「母親の腹を切り裂いて／月足らずで取り出された」(‘Macduff was from his

mother's womb / Untimely ripped') と言っている。「時」に逆らって生きたマクベスは、これまた「時」に逆らって(untimely)生まれ出たマクダフに倒された。異様な「時」は異様な「時」の子を生むほかない。子供のいないマクベスは皮肉にも自らの異様な「子」を生み出し、そしてそれに倒されたことになる。マクベスが自ら倒れたという印象が最後に残るのも当然のことかも知れない。

そのマクベスが最後にたどりついたのは以下のような認識であった。

明日、明日、明日

時は小きざみな足どりで一日一日を這うように、

時の記録の終の一語にたどり着く。

昨日という昨日は、阿呆のために、塵に返る死への道を

照らしてきたひと筋の光。

人生は歩き回る影法師

.....

たかが白痴の語る

一場の物語だ、怒号と狂乱にあふれていても

意味などなにひとつありはしない (大場建治訳)

疾走する時間を生きたマクベスは、この人生の終わりに、日常的、現実的自然のリズムを刻む時間のゆるぎない、あざむくことのできない歩みに思いを馳せるのである。このような認識を獲得し、それをバネに最後の戦いに臨み、永遠の時間へと姿を消していくマクベスの背後には、悪魔的時間から解放された姿の残照が見える。マクベスの死によりスコットランドは異常な時から解放されたが('Time is free'), 解放されたのはマクベス本人でもあった。

以上の『マクベス』は「時の演劇」と呼ぶにこそ相応しく、「時」への認識もここに極まったとの感がある。そしてその後にくるのが、前述した『冬の夜ばなし』の和解と再生をもたらす恵みの「時」であるとすれば、シェイクスピアの「時」を巡っての歩みは、その終焉に向けて見事な軌跡をたどったと一先ずは言えるのかも知れない。

(当日触れることが出来なかった点やその後考えたことを多少加筆しました。)

J. Kevin Varden

教養教育センター

Rather than undertaking one of many new projects of interest while on sabbatical leave Academic Year 2008, it seemed prudent to take a step back and revisit some older research that had never reached satisfactory conclusion. Above all this meant going back 10 years to my dissertation project, since with the exception of a conference poster presentation I had not yet published on that research.

Entitled *On High Vowel Devoicing in Standard Modern Japanese: Implications for Current Phonological Theory*, my dissertation project began as a purely phonological study of vowel devoicing. However, it quickly became apparent from my own investigation and the current literature that any purely phonological analysis would be left sorely wanting. The project therefore underwent metamorphosis into a hybrid phonological interpretation of phonetic measurements. The challenge then was educating myself in ways phonetic while blending the advice of the phonologists and phonetician on my committee into a coherent whole; the challenge on sabbatical leave was, first of all, taking recordings and measurements made with 10+-year-old equipment and software and transferring them to modern equipment. The second challenge was remembering where I had dropped the various threads of investigation in order to pick them up again. The work I began on sabbatical culminated in two papers, an updated summary of the main findings of my dissertation in this volume, and a study published in *The Journal of English & American Literature and Linguistics* on devoicing in the velar stop context; i.e. devoicing in the mora /ki/ and /ku/. Work analyzing the data generated during my dissertation project continues with regard to several aspects of devoicing; see those papers for details.

The second project I revisited is a web-accessible database of semantic features I undertook while at Tsukuba University in 2001 on the *Special Investigation into Languages & Cultures of the East & West* research project. The database in its current incarnation allows cataloguing of the semantic features represented by a language's adjectives as well as intra- and inter-language comparisons of adjectives sharing similar semantic features. While on sabbatical leave I succeeded in upgrading the database software to run on current machines and re-enabling the various features that broke during the transition to the newer version and platform. Work on re-installing the database on a secure office server continues.

石渡 周二

教養教育センター

William Dean Howells(1837-1921)といってもご存じの方は少ないだろうが、1870年代後半から数十年間にわたって、小説・文芸批評の分野で一番の大立者だった。この時代の有力な文芸誌*The Atlantic Monthly*などの編集長もつとめた。ミドル・ネームのDeanをとって、文学界のDeanとよばれた。Deanというのは大学でいえば学部長だが、日本流でいえば、文壇の大御所とでもいうところ。Mark Twain(1835-1910)やHenry James(1843-1916)など同世代の作家を登用するだけでなく、若い作家たちも大いに推挽した。アメリカ随一の女性詩人エミリー・ディキンソンの埋もれていた才能も早くから認めている。立派なDeanだ。ハウエルズの名はなによりも、リアリズム文学と切ってもきることができない。

南北戦争後のリアリズムの登場とその勃興は、19世紀のアメリカ文学を論じる際に必ず持ち出される。これは文学史の教科書などでは、リアリズム運動とされ、先頭に立ったハウエルズと共に、主要なリアリズム作家として、マーク・トウェインとヘンリー・ジェームズが上げられている。しかし、こうした19世紀アメリカのリアリズム文学をめぐるとある種居心地の悪さがつきまとっている。

トウェイン、ハウエルズ、ジェームズの3人はいずれも1830年代から40年代の間に生をうけ、1880年代に後世に名を残す作品を残している。ところが、3人の共通点はそこで終わる。この作家たちはお互い知り合いだが、創作の上ではまったく別の世界の住人である。ピカレスク小説仕立に奇想天外・自由奔放なエピソードを重ねて、圧倒的な存在感を示す『ハックルベリー・フィンの冒険』と、動きのない、内面の劇を重厚な文体で書きあげた『ある婦人の肖像』に共通するのは、英語で書かれているということだけである。3人を「リアリズムの作家」としてひとまとめにするのは無理がある。また、「リアリズム運動」にしても、文学運動と呼ぶにふさわしい状況が南北戦争後のアメリカに起こったわけでもなかった。ハウエルズの「リアリズム」に対してジェームズは異論があった。ハウエルズと作家と編集者以上の関係があったトウェインは、ハウエルズのリアリズム理論にそれほど関心を示していない。生活の必要もあって書評や評論を盛んに書いているジェームズにトウェインの作品にふれた文章はない。

「19世紀アメリカのリアリズム文学」を論ずるときの違和感は「アメリカン・ルネッサンス」の時代に対する素朴な疑問と似ている。1830年代から50年代にかけてロマン主義の作家の主要な作品が刊行されている現象を論じたF. O. Matthiessenの大著*American Renaissance*(1941)に由来する言葉だが、「アメリカ文学の再生」というのは衰退した時期を前提にしている。が、植民地時代から200年余りでしかない当時のアメリカには、「再生」を云々するほどの文学の歴史はない。「アメリカン・ルネッサンス」は現在、1830年代から南北戦争前の文学を呼ぶために便宜的に使われ、意義があるとすれば「アメリカ文学の再生」ではなく、「国民文学の創造」を指すことが明確にされている。「リアリズム文学」にも同様の吟味が必要だ。19世紀アメリカ・リアリズム文学で明らかなことは、ハウエルズが「リアリズム文学」を唱え、論陣を張ったということである。

ハウエルズはよくある孤高の作家、芸術家といったロマンティックな概念には似合わない、かなり世俗の人間である。だが、ハウエルズが南北戦争後のアメリカ社会のたどった道に疑いを持った作家のひとりである。農業中心だったアメリカが工業化、産業化の傾向を強め、物質的には空前の繁栄を示し、人々が一攫千金の夢にかられて、ドル獲得に狂奔した時代だった。だが、その反面、経済の急成長のひずみとして、政財界が癒着して政治は極度に腐敗し、社会不正、道徳の墮落は社会のすべての階層まで及んだ。アメリカ史上まれに見る繁栄と腐敗とが背中合わせに出現した時代であった。

ハウエルズのリアリズムは、作家には社会を忠実に反映した作品を書く義務があるという社会的責任論である。19世紀後半に入って読者も急激に増え、多様な層にわたるようになったのに、依然として荒唐無稽と大衆小説やロマンス小説、お涙頂戴の情緒的な小説が市場を跋扈していた。混然とした社会の実像に背を向けた娯楽・暇つぶしにしかならない小説を書くのは専門家としての小説家の任務を放棄したものであるとハウエルズは考えた。小説というものは様々な形式をとることができる。真摯なリアリズム文学を、というハウエルズの主張は、そうした文学の現状に対する異議の申し立てである。また、それは文人作家・学者作家といったエリート層出身の文学好きが生み出す「遊び」としての文学に決別し、職業作家の社会的な立場を確保し、文化的権威に仕立てようとする試みでもあった。

尊敬する小説家が人生のある種の面を扱おうとするのなら、真剣に取り組んでいることに対して疑う余地のない証しを示すよう人々は求めている。また、科学的な態度を望んでいる。小説家はもはや娯楽という場だけで受け入れられることは期待できない。彼は医師や聖職者なみの崇高な職務をひきうけるのであって、そうした専門職を拘束している厳粛な掟に従うことが期待されているのだ。小説家が自分たちを裏切ったり、自分たちが寄せている信頼を粗末に扱ったりはしないと固く決心していると人々は考えている。(Criticism and Fiction)

(2009年6月10日)

原 宏之

教養教育センター

昨年秋にわたしは三ヶ月の在外研究を頂戴しました。正式な受け入れ先は、ポンピドー・センター附属研究所(客員研究員)です。同センター文化開発部門長のベルナール・スティグレール氏の行動に随伴しました。

附属研究所ではエンジニアたちの要望に応じて、「ニコニコ動画」や「2ちゃんねる」を翻訳紹介するゼミを行いました。

スティグレール氏が創ったArs Industrialisでは、多くの芸術家や哲学者たちと出会い、「産業から市民の手に芸術を取り戻す」とはどのようなことかを知りました。

ほかに、留学時代にもランシエール氏やバレラ氏のゼミに通った国際哲学コレッジに参加しました。主にエティエンヌ・バリバル氏と、「公共性」(die Öffentlichkeit)の再生について、開かれた議論の場を取り戻すことについて語りました。以上。

研究所概要

研究所活動

研究プロジェクト

研究業績



越智 英輔

教養教育センター

ヒト骨格筋は可塑性を持ち、筋運動により骨格筋が肥大し筋力が増強することが知られている。継続した筋運動により長期的適応を引き起こす間には、様々な過程が存在すると考えられるが、ヒト実験では環境的・遺伝的な条件を揃えることが困難である。そのため、実験動物を用いて筋運動の量・強度を定められるモデルを作り、その効果を見ることが必要である。このような視点から、ラット足関節底屈筋群を対象にして、肉離れ損傷モデルをもとに筋運動の強度・量を定量化できるモデルを作成し、繰り返しの筋運動に伴う骨格筋の応答・適応変化を検討した。特に今回は、1) ラット筋運動モデルの作成、2) 筋運動に対する成長因子・サイトカイン応答に焦点を絞り発表した。

実験1では、ラット筋運動モデルを作成し、筋肥大・筋力増大の効果を検討した。筋運動モデルには、肉離れモデル等の先行研究をもとに強度を設定した筋運動モデルを採用した。その結果、筋湿重量はコントロール群との比較で5セッションでは有意な差が認められなかったものの、10セッション後の腓腹筋内側に有意な差が認められた。さらに筋線維レベルの検討では、筋線維の横断面積の増加およびタイプIIb/d線維数の減少とタイプIa線維数の増加から筋線維タイプの移行が示唆された。等尺性足底屈最大トルクは、筋運動実施から徐々に増加し、コントロール群との比較で筋運動12、14、16、18、20日後において有意差が認められた。以上のことから、本研究で作成した繰り返しの筋運動モデルは、ヒトにおけるトレーニングのメカニズムを検討する上で有用であると考えられた。

実験1の結果、繰り返しの筋運動によって筋が肥大するとともに筋力が増強し、筋線維レベルでも変化することが明らかになった。それらの変化を仲介する物質的要因として、サイトカイン・成長因子の関与が示唆されている。そこで実験2では、実験1で確立した筋運動モデルを用いて、繰り返しの筋運動に対する成長因子・サイトカイン応答について調べた。その結果、IGF-1 mRNA、myostatin、follistatinについては筋運動5セッション後では変化がなかった。一方、10セッション後のIGF-1 mRNAの発現量はコントロール群との比較で増加した。筋中myostatin量は、10セッション後に有意な減少を示し、一方筋中follistatin量は有意に増加した。筋中IL-6量は、5セッションのエキセントリック筋運動群、10セッションのエキセントリック筋運動群ともに有意な増加を示した。IL-1betaは、5セッションのエキセントリック筋運動群のみ増加していた。一方、IL-10は変化がなかった。免疫組織化学染色の結果から、IL-6は、筋運動5セッション後、10セッション後ともに筋線維間で主な局在が観察され、10セッション後のエキセントリック筋運動群でのみ筋線維内部及びその周囲で確認することができた。以上の結果から、エキセントリック筋運動に伴い、5セッションという比較的短期には、IL-1betaを含む一連の炎症反応が起こっており、10セッションの筋運動後のIL-6の増加は、筋線維周囲でその局在が認められたことから、筋線維での産生が含まれる可能性が示唆された。そして、比較的長期の筋運動における筋の適応は、IGF-1、myostatin、follistatin、IL-6などのサイトカイン・成長因子が相互に関与しながら導かれていることが示唆された。



嶋田 彩司

教養教育センター

1

江戸中期の天明6(1786)年頃、本居宣長(1730~1801)と上田秋成(1734~1809)によって、日本の古代理解をめぐる論争がおこなわれた。書面による両者のやりとりを整理し、一書にまとめた『呵刈葎』(本居宣長自筆本)によれば、論争は古代音韻に関わるもの(上篇計16条)と、記紀神話の信憑性に関わるもの(下篇計6条)のふたつに大別される。

下篇の論争は今日、「日の神論争」と称され、宣長の思想を理解する上での資料として言及されることが多い。とくに小林秀雄『本居宣長』(1977)においては、この大部の著書の掉尾に相当の紙幅を割いて論じており、小林が当論争を宣長の国学の特質を知るうえで恰好の材料とみなしていたことが知られる。

論争は、宣長を批判した儒学者(藤貞幹)への宣長の論駁書(「鉗狂人」)を閲覧し得た秋成が、横から割り込むかたちで宣長を批判したことにはじまる。周知のように秋成もまた真淵門下の国学者であった。したがって、この論争は同じく古道を信奉する者同士による意見の交換(というよりは、非難の応酬)という性格を有している。

宣長の論駁書(「鉗狂人」)には、次のようにある。

抑皇国は、四海万国を照し坐す天照大御神の生坐る本つ国にして(中略)万国の元にして、万国にすぐれたるが故に、天地の始より神代の事共、いと詳に正しく伝わり来て、今も古事記日本紀にのこれり。外国は(中略)いとみだりがはしきから、天地のはじめ神代の事共も、正しく詳なる伝説なくして、今まのあたり世を照し給ふ日神の始をすらすえ知り奉らず。

秋成は、この宣長の皇国の優越性を称揚する姿勢を批判する。

日神の御事、四海万国を照しますとはいかが。此には御国の内に借りたるにて、四海万国の義にあらずと思はるるは、葦原中国悉暗といふにて知らるる也。此外に御国のみならず、天地内の異邦を悉に臨照しますといへる伝説、何等の書にありや。(中略)ここに阿乱它国の画図(中略)地球之図といふ物を閲るに(中略)吾皇国は何所のほどと見あらはすれば、ただ心ひろき池の面にささやかなる一葉を散しかけたる如き小嶋なりけり。然るを異国の人に対して、此小嶋こそ万邦に先立て開闢たれ、大世界を臨照します日月は、ここに現しましし本国也。因て万邦悉く吾国の恩光を被らぬはなし(中略)と教ふ共、一国も其言に服せぬのみならず、何を以て爾いふぞと不審せん時、ここの太古の伝説を以て示さむに、其如き伝説は吾国にも有て、あの日月は吾国の太古に現はれまししにこそあれと云争んを、誰か截断して事は果すべき。

これに対して、宣長は次のように反駁する。

日神の御事を論じ奉れる、例の漢意にくくられたる物なれば、今さら弁ずるもうるさけれど(中略)書記一書に使照臨天地ともあるをばいかんとかする。唐天竺などの天地は、皇国の日月とは別也とするにや。(中略)さて万国の図を見たることをめづらしげにことごとしくいへるもをかし。かの図、今時誰か見ざる者あらん。又皇国

のいとしも廣大ならぬこともたれかしらざらん。凡て物の尊卑美悪は形の大小のみによる物にあらず。(中略)抑皇国は四海万国の元本宗主たる国にして、幅員のさしも廣大ならざることは、二柱大御神の生成給へる時に、必さて宜しかるべき深理のあることなるべし。其理はさらに凡人の小智を以てとかく測り識べきところにあらず。かくいはば又例の不測に託すといふべけれど、不可測なることは不可測といはで何とかいはむ。不可測をしひて測りいはむとするは、小智をふるふ漢意の癖也。

上記をみると、両者の立場の相違はあきらかであろう。「皇国思想の立場から(記紀の記述を)絶対視する宣長と、経験主義の立場からそれを批判的に見る秋成とが議論を戦わせた」(『上田秋成全集』第一巻解題)、とか「宣長のドグマティズムに対する秋成の相対主義」(野口武彦『秋成幻戯』)等と評される所以である。

宣長の思想は、皇国の優越性を絶対のもののみなし、記紀神話の全容認を要請するという点で、もはや宗教的な性格を帯びているといってもよい。「信ぜん人は信ぜよ。信ぜざらん人の信ぜざるは又何事かあらん」(下篇第六条)と述べる箇所にそれは端的にあらわれている。そして、小林秀雄はそのような宣長を論じて次のようにいう。

道とは何かと問はれれば、自分は、神代の伝説に「見えたるまま」であると答える他はない、と宣長は言ふ。(中略)彼にとつて、本文の註釈とは、本文をよく知る為の準備としての、分析的知識ではなかつた。そのやうなものでは決してなかつた。先づ本文がそつくり信じられておないうところに、どんな註釈も不可能なはずであるといふ。(中略)そのやうな、言はば、息を殺して、神の物語に聞入れれば足りるとした。(『本居宣長』554頁)

このやうに書いて来れば、もはや明らかであらうが、秋成の論難の正確さなど、今更、とやかく言ふ事はないのだ。問題は、宣長の側の、秋成を憤慨させた徹底的な拒否にある。何故そこが問題かといふと、この拒否のないところに、彼の学問も亦ないからである。(同477~478頁)

古伝を外部から眺めて、何が見えると言ふのか。その荒唐を言ふより、何も見えぬと、何故正直に言はないか。宣長はさう言ひたかつたのである。(同498頁)

要するに、宣長にとっての古学とは「外部から眺め」るやうなものではなかつた。古伝の内部に入り込み、虚心に古伝の文辞を読み続けた結果として、宣長の精神は古伝の趣きと共振し、古伝中の神々が神以外の何者でもないことが確信されたのだと小林は受けとっている。したがって我が国の古伝の正統性などはまったく問題にならない。全容認が可能になったとき、はじめて古伝は古伝として宣長の前にあらわれるのであり、その意味で不完全な古伝など原理的にあり得ないのだ。そしてそのたったひとつの古伝とは皇国のそれである。理由はない。わたしには長年の研鑽の果てにそのやうに信じられのだと宣長はいう。

2

小林秀雄は、秋成がそのような宣長を「憤慨憎悪」(同上478頁)したと書く。たしかに、次

のような記事をみれば、それも肯われる。

月も日も、目、鼻、口もあつて、人体にときなしたるは古伝也。ソングラスと云ふ千里鏡で見れば、日は炎々たり、月は沸々たり、そんな物ではござらしやらぬ。い中人のふところおやじの説も、又田舎者の聞ては信ずべし。京の者が聞ば、王様の不面目なり。やまとだましいと云ふことをとかくにいふよ。どこの国でも其国のたましが国の臭気也。おのれが像の上に書しとぞ。

敷島のやまと心の道とへば朝日にてらすやまざくら花

とはいかにいかに。おのが像の上には、尊大のおや玉也。(『胆大小心録』101)

秋成没前年のこの口吻は、すでに論争から二十年が経過していること、さらには宣長没後の記事であることを思えば、ここから彼の憤慨と憎悪のつよさを窺い知るにじゅうぶんである。もちろん、宣長とてソングラスを知らぬわけではない。しかし、彼の思想はソングラスで太陽を眺めて、それがまぎれもなく天照大御神に見えるという地点から報告されたものであり、太陽が炎のかたまりにしか見えない者には、「濁なき純一の古学の眼を開きて見」(下篇第二条)なさいと諭すしかないような性質のものであった。小林は秋成の側にたつて、「(宣長の態度は)言葉をはぐらかしてゐるとしか思へない」(474頁)と書くが、そうであったからこそ秋成は「憤慨憎悪」するしかなかったのだといってよいであろう。

同様のことは、記紀神話の異同に関わる秋成の批判についてもいえる。

(天孫降臨以降の神一代の年数が六十万年にあたることについて一嶋田注)是は日本紀に載て古事記には載ざるを以て思へば、太古の伝説といふにも、後に撰する人の間もらせし事も有歟、或は私意以て淘汰せし事も有しにや。二記の伝説異同少からず。然れば疑ふべからずと云共、猶疑念の休時もあらじとおぼゆ。(下篇第一条)これに対して、宣長の返答は次のようなものであった。

凡て古伝の異説は、いづれよけむと其異の間を疑ふはさることなれ共、異あるによりて其事をなべて疑ひて取らざるは非也。(中略)同国同郷の内にして当時の事すら異説はある物也。

「論の趣意聞取がたし」。宣長はびくともしない。大まじめである。「言葉をはぐらかして」などいるのではなく、そんなつまらないことを論ずるに何の意味があるのかといたげである。もはや彼の古伝信仰はその信憑性の検討というような次元を超えてしまっている。

だとすれば、私には、はたしてこれは論争であったかという想いすらうかぶ。すくなくともこの応酬から論争としての勝者を確定することはむずかしい。

3

もとより、秋成も国学者である。「大人の如く太古の靈奇なる伝説をひたふるに信じ居らんぞ直かるべき」(下篇第二条)と述べるように、彼もまた、ひとりの日本人として記紀神話の価値を説く立場にある。しかし同時に、秋成にはそれをもって他国の神話を貶める発想

はない。小林のこばを借りれば、秋成には古伝を「外部から眺め」るもうひとつの視点があった。古伝の内部に入ってそれを尊崇し、外部からその尊崇の肥大を抑制、限定するような精神の働きがあった。その複眼こそが秋成にとっての国学という学問である。宣長のようにまるごと信じてしまうというのではない。ともに国学者として立ちながら、両者のあいだには埋めようのない懸隔がある。

秋成の「神代かたり」(文化四年=1807成立か?)には、日神=天照大御神について、次のようにある。

二神はかりたまひて、国かたちとのへり。ぬしあらではとて、日の神をうみませり。此み子のみかたちきらきらしく、国の中かくれたる所なくてらしたまへり。故に天てらす日にたとへて、日の神とは申せりき。

秋成にとって太陽と天照大御神は別物である。日の神とは、皇国の輝ける主宰神を太陽に「たとへて」与えられた尊称である。

しかし、このとき、秋成はその「み子」が神であることを否定はしない。彼もまたたしかに古代に神をみているのである。「日の神」と書いてあるということを根拠に太陽を天照大御神とみる宣長を批判したのが秋成であったが、彼もまた「其代の人とは皆神なりし故に、神代とは云なり」(『古事記伝』)と述べた宣長同様、神代信認の磁場にいる。

これを「神は人なり」(『古史通』)と道破した新井白石と比較するとき、秋成の宣長批判の危うさが際立ってくるであろう。秋成の古伝を「外部から」みる眼(「歴史」認識といってよい)は、秋成に記紀への学問的な疑義をもたらしつつ、同時に古伝の尊崇を要請する。

4

そして秋成は、検証と信認という危うい往還を踏み台にして、文学者として立つこととなった。『胆大小心録』には次のようにある。

江戸の春海の翁は、とかくに学問に私めさるよと言こせしかば、答云、わたくしとは才能の別名也。(4)

又此古言をしいてとく人あり。門人を教への子と云て、ひろく来るをあつめられし人あり。やはり此人も私の意多かりし也。伊勢の国の人也。古事記を宗として、太古をとくとせられしとぞ。翁口あしくて、

ひが事をいふて也とも弟子ほしや古事記傳兵衛と人はいふとも
独学孤陋といへど、其始は師の教へにつきて、後々は独学でなければと思ふより、私ともいへ、何ともいへ、独窓のもとに眼いたためて考へて見れば、どうやら知れぬ事も六七分はしれたぞ。(5)

ここにいう「私」の語が、国学が徂徠の古文辞学に学んだ方法論(「聖典」の恣意的な「解釈」の排除)を基盤とし、「小智をふるふ漢意」(下篇第二条)と同意であることはあきらかであろう。宣長は秋成の古伝解釈をさかしらな「漢意」として非難したが、非難された秋成もまた、

宣長の古代「研究」が「信仰」を要請するような一面を「私」とみなし、むしろそれ（「私」の完全な排除が不可能であることを逆バネとして「私」の肯定へと踏み出した。

『雨月物語』の序文には、

羅子は水滸を撰して、三世啞児を生み、紫媛は源語を著はして、一旦悪趣に墮するは、蓋し業を為すことの偏る所のみ。(中略)余、適鼓腹の閑話有り(中略)則ち之を摘読する者も、固より當に信と謂はざるべき也。豈醜唇平鼻の報を求む可けんや(原漢文)とある。また、後年の『春雨物語』序には、

むかし此頃の事ども人に欺かれしを、我又いつはりと知らで人をあざむく。よしやよし、寓ごとかたりつづけて、ふみとおしいただかする人もあればとて、物いひつづければ

ともある。ここにいう「寓言論」(虚構意識)と国学の「私」とのあいだに大きな径庭はないと考えてよい。

そして、このような「私」の否定が肯定へと転ずる契機は、やはり国学自身のなかにあったといつてよい。丸山正男の言説を引用して、その説明とする。

徂徠がもつ劃期性とは、儒学の思想体系の中に、認識における主体の契機を大きく存在としてもたらしたことにある。(中略)聖典の直接的認識を求めた徂徠は後世の注解を「わたくし」として排撃したと同時に、結果的には直接的認識の主体自体にはじめてウエイトを置いて認めたこととなるのである。しかしそれは思考の支点がそのまま主体にかけられたことを意味するものではなかった。この新たな絶対主義においては、すべての判断は聖典に支点をおいて発せられなければならなかったからである。このように儒学体系は徂徠に至って、絶対思考と、それを機能的に可能にする主体契機の導入という二重の契機を内在せしめられることになった。(中略)つまりそれまで絶対的な形而上学の下で捨象されていた人間を「私」の範疇として認め、これを文芸的な面で解放したことが側面の一つであり、一方古文辞学の厳密な方法によって「私」の個的解釈を一切排除した面がその二つである。(『日本政治思想史研究』)

天明年間の論争を経て、宣長は「個的解釈を一切排除」する方向(古道への帰依)をつよくする。一方、秋成は「私」を「文芸的な面で解放」する。「神の御心」による「復古」の日を待つ(しかない)と宣言する宣長に対して、秋成が投げつけたことは、「擬古は学びて得べし。復古は学者の贅言也」(下篇第三条)は今日からみれば、鋭く宣長のメタフィジックスに突き刺さつてよいものにも思われるが、すでにみたように宣長はびくともしない。

私はさきにこの論争の勝者は決めかねると述べたが、論争後の国学の主導者としての地位をどちらが獲得したかについては言を俟たない。神とゾンガラス。宣長の信仰は篤胤に引き継がれて、幕末維新の尊王論をかたちづくることとなるが、秋成に学んだという国学の徒を私は寡聞にして知らない。

ランゲージ・ラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージ・ラウンジ運営委員会

1. 総括

2009年度もランゲージ・ラウンジは、138番教室を活動拠点とし、外国語学習の場としての機能をさらに増進させるべく活動を重ねてきた。特に、授業以外の場でも外国語学習を進展させたいというニーズが全学的に存在することをふまえ、学部・学科の枠にとらわれず参加できる講座や自律学習プログラムの開催に力を注いできたが、今年度は英語、中国語、韓国語に加えて、新たにドイツ語、スペイン語での活動も始まり、いっそうの充実をみることができた。これらは学生間だけでなく外国語を担当する教員間においても好評を得ている。また、2009年10月14日には明治学院大学全学共通科目教育機構会議においてこれまでの実績を報告する機会を得たこともあわせて、今年度は様ざまなレベルにおいてランゲージ・ラウンジの学内認知度を高めることができた。

いっぽう、自律学習をサポートするための体制は整いつつあるものの、依然として学生から多く聞かれる国際交流、特にネイティブスピーカーとの交流のための機会はじゅうぶんに提供できていないと言いき難い。今後は、学生が学内の留学生や学外からのゲストなど、多様な背景の人々と出会い、言語を通じて交流するための場としてもランゲージ・ラウンジを発展させていきたい。

2. 活動詳細

2.1. 英語部門：北村文、ピーター・ソートン

英語部門では、昨年度に成功をおさめたふたつのプログラムの充実に向けた。第一には、自律学習をサポートするための集中プログラムであるIndependent Language Study Support Program (ILSSP) を春学期と秋学期の二期にわたり実施した。コーディネーターは昨年度に引き続き、小泉有加氏・櫻木新氏(本学非常勤講師)が担当した。新たな試みとして、修了式とオリエンテーションを同時開催し、新規募集に応じた学生がプログラム修了生たちの達成感や満足感に触れる機会を設けた。応募者数は毎回50名から60名と募集枠を大きく超え、エッセイによって参加者を選出することとなった(参加者の詳細は表1を参照)。プログラム参加学生は毎週決められた時間にラウンジを訪れ、コーディネーターに自律学習の進捗状況を報告するが、具体的な相談や質問が多く寄せられ、なかにはより高レベルな課題に挑戦したいと言う参加者もいるほど、積極的な学習態度が広く見られた。

第二には、授業内で学んだスキルを実践にうつすための場として、全編英語でレクチャーを聴くLuncheon Lecture Seriesを全5回開催した(各回の詳細は表2を参照)。全体的に昨年度を上回る参加者数を得たことに加えて、ILSSP生にはこのレクチャーへの参加を義務づけたため、講義中にメモをとったり講義後には講師に英語で話しかけたりという熱意ある受講者も目立った。

こうした活動を通じて、学生の英語学習意欲に応えさらにそれを増幅させるよう努めてきたが、同時に、ラウンジでの課外活動が彼ら彼女らの英語科目履修とのあいだに相乗

効果をもたらしているということも明らかになってきた。既に、授業のなかでわからなかったことをラウンジで質問する学生や、ILSSPを修了したあとTOEFL iBTに特化した科目に挑む学生、そしてレクチャーを聴いた先生の授業を次年度に履修したいと意気込む学生がいる。将来的には、「英語研究」や「I 群科目」といった英語科目と連携し、学生が授業で達成した内容を発表する場としてもラウンジを役立てていきたい。

2.2. 中国語：張宏波

中国語部門「中文会話倶楽部」は、2008年度の参加者たちの「昼休みの短時間だけでは物足りない」という声にこたえて、2009年度は4月下旬から授業期間中の毎週木曜に12:35～14:05に時間を拡大して開催した。また、新たにネイティブスピーカーである何立人氏(本学非常勤講師)をコーディネーターに迎えた。

授業だけでは満足できない、あるいは授業で学んだ知識を実際に使ってみたい、という意欲的な学生が毎回3名～7、8名程度集まり、担当者や学生同士で日常的な中国語会話を楽しんだり、文法事項の復習・確認をおこなったりして展開している。

参加者は国際学部、経済学部、法学部の1年生から3年生にわたっており、学部・学年の垣根を超えた広がりや刺激を与えている。途中から、就職が内定した国際学部4年生(中国語未習者)も、一から学びたいとのことで時々参加している。また、経済学部の1年次の中国人留学生、韓国人留学生も参加してくれるようになり、既に高校から学習してきた高い会話力を有している学生にも満足できる場になっている。

社会における中国語ニーズが大きく増えている中、学んだ言語を実際に「使えるように」なりたいと考えている学生も増えてきており、資格試験講座の紹介のほかにも、それにこたえる工夫が求められるところである。また、心理学部や上級学年の学生からは昨年度にも「白金でも開いてほしい」という要望があった。上級学年の学生の就職活動に対する効果的なサポートが求められていることを考えると、今後は何らかの形でこたえていく必要があるかと思われる。

さらに、中国語履修者のなかには、まず短期の中国留学を経験した上で、その後のことを考えたいという要望も少なからず聞こえてくる。ランゲージ・ラウンジへの参加がそうした姿勢を後押しする契機となるように、つまり、将来的展望を有した中国語教育の一環となるように、さらに工夫を重ねていきたい。

2.3. ドイツ語：川島建太郎

ドイツ語部門では、今年度新たに「ドイツ語相談室」を開設し、春学期は隔週で、秋学期は学生からの要望により毎週、金曜日の昼休みに学習相談の機会を提供した。「ドイツ語特別研究」を履修している学習意欲の高い学生が毎週2～5名参加し、その都度、学生の学習進度に合わせて文法説明などを行なった。履修や留学に関する相談にこたえるというよりも、

補習的な活動が中心となったが、12月11日には、昼休みから3時限の時間まで、431教室にて、映画上映会も行なった。

2.4. スペイン語:三角明子

スペイン語部門では、春学期には教務課を通じた相談にこたえる形で、2名の学生の学習相談と補習を行った。これを踏まえ、秋学期中盤の11月16日から2010年1月18日まで合計7回、原則として毎週月曜日の13時～14時半に「ランゲージ・ラウンジ スペイン語相談室」を開催した。

秋学期中盤にスタートしたこともあり、利用者は決して多くはなかった。ほぼ全回参加した学生が1名(検定試験対策)、その他の学習相談1名、スペイン短期留学を予定している学生合計7名が現地で活動について相談に現れた程度である。

来年度は春学期から定期的に[相談室]的主旨で開催する予定である。学生たちの意欲が高い春学期スタート時に効果的な広報および機会提供を行うことで、利用者数の伸びを期待したい。

2.5. 韓国語部門:金恩愛

韓国語部門では、秋学期に全5回の「韓国語会話カフェ」を開催した。11月19日から12月17日までの毎週木曜昼休みに137番教室を使用して行ったが、平均して8名ほどの学生が参集した。学生はみな明るく楽しそうな表情で会話に加わっており、教室での学習内容を実践にうつせる場のさらなる活性化が望まれるところである。

表1 ILSSP実績

実施期間	参加者数	修了者数
春学期 (5月～9月)	36名(文学部8、経済学部2、社会学部0、 法学部11、国際学部15)	21名 (特別賞4名)
秋学期 (11月～3月)	39名(文学部11、経済学部3、社会学部6、 法学部4、国際学部15)	(2010年3月に決定)



表2 Luncheon Lecture Series 実績

	日付	タイトル	講演者	参加人数
第一回	5 / 13	What is Art?	Peter Thornton (教養教育センター)	約60名
第二回	6 / 25	Identity...?: The Politics of "Who I Am" and "Who you Are"	Aya Kitamura (教養教育センター)	約80名
第三回	10 / 1	A Linguistic History of Japanese	Kevin Varden (教養教育センター)	約30名
第四回	11 / 19	Digging up the Past: A Very Brief Introduction to Archeology	Dax Thomas (本学非常勤講師)	約60名
第五回	12 / 19	First Nation's Traditional Salmon Fishing	Kaoru Kiyosawa (本学非常勤講師)	約20名



研究所概要

研究所活動

研究プロジェクト

研究業績

研究プロジェクト



大学教育・研究活動における映像資料の活用

原 宏之・福山 勝也

教養教育センター

今年度はメディア研究(テレビ・映像・マルチモダル研究)の最終年度として、成果を教育に応用する形態をとった。具体的には講義科目(「ヨーロッパ語圏の文化」「現代世界と人間」など)で、映像資料を使い、背景のプロジェクト研究成果を踏まえて、受講学生への説明を行うというものであった。

結論から述べると、戦後から六〇年が経ち、また国語入試から漢文が消えたりといった初等・中等・高等教育の必ずしも向上とはいえない状況のなか、学生たちの歴史感覚および(世界)地理感覚が稀薄となるなか、映像資料を授業に使うことは、「わかりやすい」、導入として有用であったといえる。受講生たちのアンケートも、映像により「真実を知った」ことの驚きが多く書かれていた。このことは新聞・地上波テレビなどの限界、読まれなくなり視聴されなくなった(ネットの普及のせいばかりでなく番組編成・制作を観察してきた限り当然のなりゆき)なかで、よい点だといえる。しかしながら、映像資料を使った後で、この作品・番組は「事実」を生のままに伝えるものではない、撮影から編集のなかでの取捨選択による特定の意思、メッセージ、イデオロギーを孕むものであることを教えることが重要である。

太平洋戦争、世界経済(企業)、メディア、社会運動史(パリ68年五月、米国市民権運動、ベトナム戦争関連)、生態系、里山などの資料を使った。上記のことに触れて一例を挙げると、太平洋戦争の南方戦線を証言する番組・ドキュメンタリー／フィクション映画は多数あるものの、史実を研究者としての文献読解で確定し、また同時に『野火』など豊富な戦中文学作品と比較対照することで、学生のパースペクティブはより広がり、また担当教師—研究者の限界内ではあるけれども、より精確に映像資料を消化できることになったと思われる。

関連授業のひとつである「ヨーロッパ語圏の文化」でいうと、グローバル化のこんにち、歴史研究や地域研究でもない限り、特定の言語地域で教えるにはかなりの限界を感じた。またふだん眠っていた学生たちが『古事記』の解説のときに熱心に聞いていたことを余談であるが付言しておきたい。文責・原

アートを通じた新しい教養教育(リベラルアーツ)の探求

: 芸術、農業、ボランティアという切り口から

猪瀬 浩平・植木 猷・三角 明子

教養教育センター

「アートを通じた新しい教養教育(リベラルアーツ)の探求: 芸術、農業、ボランティアという切り口から」は、環境や福祉、文化をめぐる複数の「現場」に蓄積された「知」を発掘し、表現し、共有する手法としての「アート」の可能性を実践的に探求する。詩や絵を用いた地域文化の「聞き書き」に取り組むNPO法人や、都市近郊農地を活用したアートプロジェクトに注目し、それらの実践が、大学における教育活動に如何に応用可能かの検討を行なう。

本年度は以下の3つのプロジェクトを主に実施した。

1、「郡上おどり×戸塚」プロジェクト



本プロジェクトは、岐阜県郡上八幡に伝わる民俗芸能である郡上おどりを、大学キャンパスや戸塚の地域に持ち込むことによって、アート(=民俗芸能)を媒介にする如何なるコミュニティ形成が図られるのか実践的に探究するものである。

岐阜県の郡上八幡に伝わる郡上おどりは、日本三大盆踊りのひとつと言われ、400年の歴史を持つ。踊る期間は7月、8月の三十二夜に及び、盂蘭盆会の四日間の徹夜踊りを頂点に、郡上の住民ばかりではなく、地域外から訪れる踊り客30万人を集める。10曲に及ぶその踊りには、世代を超えた郷土への愛着をはぐくむとともに、宝暦郡上一揆等の民衆の記憶を伝える文化装置としても存在している。

2009年度は、5月30日に開催された「戸塚まつり」に、教養教育センター企画として公開講座「郡上おどり: 戸塚にひびく下駄の音」を開催し、郡上八幡を拠点に活動する若手御囃子グループ「郡上舞紫」のメンバー10名を招いた。戸塚まつりでの公演は昨年に続き2回目である。

第一部は、教室で開催し、郡上八幡の風土や郡上おどりの歴史、およびそれぞれが踊りにかける思いの説明、現地の映像上映、そして10ある踊りのすべての説明を行った。来場者は、この企画を楽しみに戸塚まつりを訪れたという熱心な郡上おどりファンの方もいれば、三味線と太鼓の音に惹かれて教室に入ってきた年配の方もいた。またボランティア実習101で郡上八幡を2008年に訪問した学生も参加し、議論に参加した。

第二部として、本来であれば体育館の横の空き地での踊り体験を計画していたのだが、天候不安のため急きょ体育館の第3フロアでの開催となった。メンバーによる踊りの講習の後、郡上舞紫の演奏と踊り実演に導かれながら、飛び入り参加者を含めて30人程が輪をつくった。踊りに参加したある学生は「見知らぬ人と踊っているのに、何故か一体感を感じることが出来てとても心地よかった」と語っていた。

今回さらに第三部として、戸塚駅近くの善了寺で夕刻より、善了寺の境内での踊りの実演、および本堂の中での講演を行った。踊り実演では、大学からの参加者ばかりではなく、近隣住民の方ばかりではなく、善了寺が運営するデイサービスを利用しているシニアの方々も輪に加わった。善了寺の住職のご厚意、および善了寺中心に活動しているカフェ・テラ・テラの方々の協力によって、このような場が実現した。

郡上踊れないのに輪に入る。踊れなさに笑ってしまう。ぎこちない踊りでも郡上舞紫の人の声と踊りと下駄の音、熱気からできる雰囲気でもってかれる。自分も出来る限り、自分の精一杯の表現で主張して、それは潰されずに伸ばされ、そして一つの輪を形成していくように感じた。そこに表現する場があり気持ちよさがあり一体感を感じさせるのだろう(社会学科2年森田友希さん)。

今年度は、キャンパスの外に活動の場を広げることができた。善了寺を訪れた人の中には、戸塚在住の郡上おどりファンも多数おり、来年度は町内会や自治会を巻き込みながら、さらに規模を大きくして開催することが計画されている。ここにおいて、郡上おどりは再開発が進む戸塚駅周辺地域の活性化のひとつの核となることが期待されており、コミュニティ形成の可能性を模索する本研究プロジェクトの趣旨に思わぬ形で合致することとなった。

来年度は、教養教育センターの新たな活動拠点として開設されたヘボンみらい塾の活動とも連携し、学生たちの協力を受けながら、大学と地域のコラボレーションの可能性を、アートや民俗芸能という切り口から探求したい。

(文責 猪瀬浩平)

2、アート・イン・ファーム

アート・イン・ファームは、アートを通して農地の保全・活用を模索・提唱していく運動である。2007年東京都立川市で始まり、今年で三年目を迎える。一見関係なさそうな「農業」と「アート」をコラボレートさせることで、特に都市近郊の農地が持つ独自の意義を周知させることを目指している。また「農業」と「アート」との相互の刺激によってそれぞれの社会的意義をより高めることも目的としている。日頃人が立ち入ることの少ない農地でイベントを企画し、様々な人々が「農地」という場所で出会うこと、また人と自然が出会う場所をつくることを中心的な活動とする。本来、田畑は米・野菜などの商品作物だけではなく、文

化をも生産する場である。活動を通してagricultureとcultureの持つ根源的なつながりを実体化していきたい。

2009年度は1)農地でのイベントの企画・実施、2)農産物のパッケージデザイン請負、3)生産緑地の文化的活用のためのコンサルティングの3つが主な活動であった。2)、3)は農家や農協からの依頼により行っているが、先方の都合もあり現時点では詳述することが出来ない。しかし2010年度中にいくつか公表される予定であり、その時点で改めて報告したい。

1)に関して2009年度は以下の4つのイベントを実施した。

a) 梨花のもと琴の調べを楽しむ会

国際交流基金派遣事業でイタリアなどでの演奏経験もある、生田流宮城社教師の鈴木恭子氏と門弟の手塚陽子氏、酒井ひろみ氏に出演いただき、井上農園の満開の梨の花のもとで演奏を行った。

日時:2009年4月11日(土)、12日(日)14時~15時30分

会場:井上農園(立川市富士見町)

参加者:140名 ボランティア学生・卒業生:5名



b)「子供たちとアーティストによるアートインファーム・ワークショップ~自然の大切さを遊びながら知る~」

アートワークショップ

- リーフミラーをつくろう…宗政浩二 ●植物を観察してモビールをつくろう…水内貴英
- 竹の水鉄砲をつくろう…三梨伸

日時:8月1日(土)、2日(日) 13:00~15:00

会場:小林養樹園(立川市西砂町)

参加者:43名 ボランティア学生:4名

天候に恵まれず2日目は豪雨の中での開催になったが、農業やアートに触れる教育に強い関心を持つ参加者が多かったのが印象的だった。



c) 葡萄棚の下でシルクロード音楽を楽しむタベ

ぶどうの収穫時にぶどうの原産地といわれるアフガニスタンの音楽のコンサートを開催した。日本のアフガニスタン音楽の第一人者である「ちやるぱーさ」(佐藤圭一、やぎちさと)を招き実施した。

日時：9月19日(土)、20日(日) 18:00～20:00

会場：井上農園(立川市富士見町)

参加者：200名程度 ボランティア学生：9名



d) 雑木林の現代アート展

日時: 10月17日(土)~22日(木)

会場: 藤野農園(立川市若葉町)

ケヤキなどを育てる畑で現代アートの作家の作品を展示し、会場自体をアートの作品にする。また来場者が参加することで完成するアートなど、パフォーマンスもあわせて行った。

- 大畑周平…太陽の光を飲むワークショップとアートパフォーマンス ●三梨伸…手の痕跡の残る陶片を使って、地形や樹木を利用した風景作り ●宗政浩二…子ども達が植物の柄を描いた鏡を太陽に反射させて模様を描く、リーフ・ミラー・プロジェクト
- 吉田重信…林の中の虹を作るワークショップ ●脇田真…「大地の面影」



参加者: 600名程度 アートの解説をする立川市の市民ボランティアの協力により運営したため、学生ボランティアの参加はなし。

今年度は参加者総数1000名近い活動となったが、こうした活動を教養教育に還元する可能性は以下の3点にあると考えられる。それは、キャンパスから離れた農園という環境で、1) 農家やアーティスト、地域住民など日常的に接する機会の少ない多様な人々と出会う機会、2) 発想や行動様式の異なる人々とマニュアルのないところで試行錯誤し、協力して企画を実現させる経験、3) 元来別々の事柄を結びつけて一つのものとして説明していく論理などに、ボランティアとして参加する学生たちに触れてもらうことである。このような出会いを自ら咀嚼した経験とし、それを応用するために論理として再構築する意義を引き続き検証したい。

2010年度は研究プロジェクトを立ち上げて3年目となるため、上記の教養教育への還元の可能性をふまえ、これまでの企画や活動の意義を総括する報告書を作成する予定である。

(文責 植木献)

3、¡Fiesta! Art on Campus '09

2009年6月1日(月)～5日(金)、センター付属研究所プロジェクト「アートを通じた教養教育の探求」の一環として、横浜校舎10号館一階ラウンジを主会場に¡Fiesta! Art on Campus '09を開催した。

- ・スペイン短期留学写真展(会期を通して実施)

主会場となった10号館一階ラウンジには、2008年度のスペイン短期留学派遣学生たちが現地で撮影してきた写真、およびスペイン語圏つながりでコスタリカの写真を展示した。写真撮影および展示作品の選定・写真につけるキャプション・展示設営は、留学を経験した学生たちが行った。ラウンジの壁面およびガラス面の約半分が写真で埋まり、「フィエスタ」の名にふさわしい祝祭的雰囲気舞台が整った。

ラウンジはまた、スペイン語圏という共通項を持つ数々の催しの舞台ともなった。

- ・「南北問題としてのベネズエラ」(国際平和研究所と共催)

6月1日(月)11時40分～12時25分、勝俣誠国際学部教授&日置NHKディレクターの対話という形で実施。参加学生約50名、ほか聴衆としてスペイン語担当非常勤教員3名。

ベネズエラのチャベス大統領に関する番組を制作した日置ディレクターのお話を中心に、ベネズエラをはじめとする南米でなにが起きているかについて話し合われた。昼休みには引き続き国際平和研究所のCafé du PRIMEとして、猪瀬教養教育センター専任講師も参加し、小規模な懇談会となった。聴講に訪れた学生たちからも質問やコメントが出、活発な議論が交わされた。

- ・「スペイン語圏のfootball事情」(本学非常勤講師藤城仁音氏)

6月4日(木)昼休みに実施。参加学生約20名。

学生たちに特に人気のあるサッカーを中心とした、スペイン語圏での「フットボール」についてのレクチャー。数値や写真などを駆使した、具体的でわかりやすいお話をいただいた。藤城氏への交渉、当日の運営について、健康スポーツ科学担当の同僚諸氏にたいへんお世話になった。

- ・舞踏研究会によるタンゴ・チャチャチャ・パソドブレのパフォーマンス

6月5日(金)昼休みに実施。

社交ダンスのラテン種目の中から、特にスペイン語圏と関わりの深いチャチャチャ、タンゴ、パソドブレを中心としたパフォーマンスを行った。昼食利用目的にラウンジに集まっていた学生たちも、舞踏研究会の学生たちの質の高いパフォーマンスに誘われて、プログラムが進行するとともに上演スペース近くに集まってきた。

10号館ラウンジ以外で実施されたプログラムは以下の通り。

- ・ウルグアイの短編アニメーション&ウルグアイ紹介ビデオ上映

6月2日(火)昼休み、1051教室で実施。参加学生は残念ながら3名。

駐日ウルグアイ大使館から映像のコピー提供を受け、近年ウルグアイで製作された短編アニメーション4本を上映した。また、ウルグアイの紹介映像も流した。

・ ¡Qué rico! スペイン料理ミニレクチャー&試食会(事前申込み制)

6月3日(水)昼休み、ブラウン館で実施。事前申込み制とし、40名を募集したところ、補欠者が出る人気となった。企画への協力学生・近隣地域からの招待者も含め、56名が参加。

京浜急行線黄金町駅近くのスペイン料理店エルニョスキのオーナーシェフ寺門鉄也氏および店のスタッフ2名が来校し、アルボンディガス(肉だんご)、パンコントマテ×2(トルティージャエスパニョーラ乗せと生ハム乗せ各1)を提供した。軽食の前後には、事前に学生から集めておいたシェフへの質問に基づいて寺門氏がスペイン料理についてのレクチャーを行った。

また、当日の料理の一部はリリパック容器で提供し、食後には学生団体エコキャンパスミーティングの掛け声のもとリリパック剥きをし、ささやかながら啓発活動にも寄与することを試みた。

・フラメンコ@チャペル

6月3日(水)15時20分~16時、横浜校舎チャペルで実施。参加者は学生・教員・外部者で約40名。

明治学院大学の卒業生をコアメンバーとするフラメンコユニット、Los Festeros ロス・フェステロスの5名によるフラメンコパフォーマンスを行った。当日は歌と舞踊だけでなく、歌詞の内容説明や、踊りの特徴なども簡潔に講義していただいた。

チャペルでのフラメンコ公演実現にあたり、お骨折りいただいた横浜宗教部の小西さん、そして練習場所として予約済みだったところを譲ってくださったグリークラブのみなさんにとくに感謝したい。

・メキシコ海軍の訓練帆船クアウトモック号訪問(駐日メキシコ大使館協力)

6月4日(木)午後、横浜港に停泊中のメキシコ海軍の訓練帆船クアウトモック号を訪問、見学した。参加は事前予約とし、学生7名・教員2名が訪問した。船上ではメキシコ海軍士官による船の説明、および士官ラウンジにおけるレクチャーを受けた。

この一週間の主たる企画担当は三角明子がつとめたが、プロジェクトの共同研究者である猪瀬浩平・植木献両氏はもちろん、多くの同僚および学生、そして外部の方々にご協力いただいたおかげで実現した企画である。また、催行にあたっては教養教育センターに共同主催という形を取っていただくことができた。関係諸氏、とりわけセンターの教学補佐のみなさんに感謝したい。

(文責 三角明子)

「東アジアから見る日本のキリスト教」報告

渡辺 祐子・永野 茂洋

教養教育センター

日露戦争終結後から次第に本格化してゆく日本の大陸進出の過程——とりわけ満州国建設から日中全面戦争を経て1945年に敗戦を迎えるまでの間——において、中国をはじめとする東アジアにとって、日本の教会およびキリスト者の振る舞いはどのような意味を持ったのか。本研究プロジェクトの目的は、この問いを出発点として、アジア・太平洋戦争期における日本のキリスト教のあり方を、東アジア諸国の日本に対するまなざしを通して考察しようというものであった。

まず資料として、日中全面戦争開戦前後に南京で発行された Information Bulletin, Council of International Affairs, 1936-1937を全冊揃えた。これは、戦争前夜の中国に在住していた内外の学者、ジャーナリスト、宣教師らが、日中関係を中心に論じた論考をまとめたものである。キリスト教関連の情報に特化してはいないが、当時の生の声を伝える第一級の貴重な資料である。

当初の予定には組まれていなかったが、12月のアジア文化祭開催に合わせて、当プロジェクト予算を執行し、班忠義監督作品『ガイサンシーの姉妹たち』上映会及び監督の講演会を開催することができたのは、大きな収穫であった。日中戦争期、山西省に進軍した日本軍は、現地の中国人女性を複数一定期間監禁し、性奴隷とした。この作品はこれらいわゆる「中国人元慰安婦」へのインタビューを中心に構成されたドキュメンタリーである。もとよりこの作品はプロジェクトのテーマに直接関わるものではないが、中国との間に真の信頼関係を作り上げていく上で、歴史認識問題の克服が必須の課題であること、それは日本のキリスト教が1967年の日本基督教団による戦責告白の内容をさらに深め、過去の自らのあり方を徹底的に問い直すことに直結することを考える時、上映会と講演会の開催は大いに意味あるものであったといえる。学生に対する教育的効果も非常に高かったことを付言しておきたい。

実は上記上映会および講演会の実施は、日中戦争期山西省の部隊の衛生兵として従軍していた引退教師松本栄好氏(日本キリスト教会)が、近年精力的に行っている証言活動に触発されたものであった。松本氏は、ここ数年日本の行く末に大きな危機感を持ち、勇を鼓して、インタビューや講演の依頼に積極的に応じておられるが、そのさししばしば上記の映画の原作である『ガイサンシーとその姉妹たち』に大きな衝撃を受けたと語っている。キリスト者として自身の戦争体験、さらには戦時中の日本の教会のあり方をどのように総括すべきかを問い続けている松本氏の姿勢は、このプロジェクトのテーマと共振するものといつてよい。

プロジェクトの当初の予定では、松本氏はじめ、満州国での生活経験を有するキリスト者へのインタビューなども試みるはずであったが、諸般の事情から計画倒れに終わってしまったことは、大きな反省点である。本研究プロジェクトは来年度継続の予定はないが、このインタビューは別な形でぜひ実現させてゆきたいし、このテーマ自体も今後継続して追求してゆきたいと考えている。

最後に本研究プロジェクトの成果のひとつとして、共同執筆論文「日本のキリスト教と植民地伝道：旧満州「熱河宣教」の語られ方」(明治学院大学国際平和研究所紀要『PRIME』第31号掲載予定)の渡辺担当箇所である第一章「満州プロテスタント史における東亜伝道会と熱河伝道」を挙げておく。

中国語教育プログラムの改革に向けた基礎的調査研究

張 宏波・川俣 優 竹中 英佐子

教養教育センター

目白大学講師、明治学院大学非常勤講師

日中間の交流が飛躍的に拡大するにつれて中国語履修者の数は増えており、基礎的な中国語能力を身につけた人材を多数輩出することが中国語教育に従事する者の社会的責務となっている。本学においても、中国語は初習外国語のなかで履修者数が最も多い言語となっている。他方で、中国語教育は、教育プログラム、教授法、教科書、検定試験制度、留学制度など多くの面で開発途上にある。

第一に、授業の仕組みや教授法、教科書の選定など平常授業において改善を要すると思われる要素があり、この点は意欲的な学生からの不満の声もあがっていることを考え合わせれば、早急な検討・改善を要する。

第二に、課外プログラムとしては、検定試験対策が今年度から開始された。一方、留学制度の利用者はきわめて少なく、プログラムの内容、提携先、告知方法なども含めた検討が必要な状況である。

以上の課題を前にして、中国語教育プログラム全体の再検討を進めていく必要があると考え、改革の方向性を見定めていくための根拠となる材料を収集していくことを目的に本プロジェクトを推進した。

以下は、その主な取り組みである。

1. メンバーによる打ち合わせ会

2009年5月18日

メンバー間で研究課題や方法等について確認しあい、それぞれの取り組みの狙いと計画を検討しあった。

2. 社会的要請の変化にいち早く対応した他大学の取り組みに関する調査

2009年6月 亜細亜大学「アジア夢カレッジ」プログラムについて担当者への聴き取り調査を実施

2009年11月 釧路公立大学の中国語教育における漫画の活用について担当者への聴き取り調査を実施

2010年1月 大阪府立大学「リズムで学ぶ三文字中国語」教材開発および教授法について担当者への聴き取り調査を実施

3. 学生を対象にしたアンケートの実施

2009年7月と12月 川俣、竹中、張の担当クラスで実施

主な内容：教科書の文法事項などの使いやすさ、ペアの教員の役割分担、留学・交流について

4. 本学中国語教員を対象にした研究会の企画と開催

2009年11月7日 「初習中国語文法教育の課題と新たな取り組み」

講師：宮岸雄介氏（東日本国際大学経済情報学部准教授、本学非常勤講師）

2010年1月16日 「初習中国語ガイドラインとその教育実践について」

講師：島田亜実氏（日本大学非常勤講師、本学非常勤講師）

2010年2月8日 「慶應義塾大学SFC中国語教育の試み」

講師：氷上正氏（慶應義塾大学総合政策学部教授）

5. 研究期間終了直前の執行について

・他大学の取り組みに関する調査

2010年2月下旬 早稲田大学オープン教育センター「チュートリアル中国語」について

2010年3月下旬 駒澤大学「映画をアプローチとした中国語学習について」

・本学の他の初習言語のカリキュラムに関する調査

2010年2～3月 スペイン語、ドイツ語、フランス語、韓国語の各担当者を対象に実施

・本学中国語非常勤講師を対象にアンケート調査&聴き取り調査

2010年3月31日 諸初習語合同研修会後に中国語非常勤講師を対象に実施

以上の調査研究については、現在実施中の段階であり、この場でまとまった報告を行うことが難しい状況にある。詳細は2010年度の『カルチュラル』誌上で報告する予定である。

以下では、現時点で明らかになっている知見について簡潔に触れておきたい。

第一に、社会的要請の変化にいち早く対応した取り組みを行っている他大学への聴き取りを踏まえて言えることは、改革の方向性を検討するにあたって、本学らしい中国語教育の特色を最終的には打ち出すことを見据えておく必要があるという点である。留学制度の拡充と関連して検討するののも一つの方向性であると考えている。

第二に、アンケート調査の結果から言えることとして、「教科書のわかりやすさ」「ペア教員の役割分担」などの点に学生が問題を感じていることが浮かび上がった。また、留学を含めた国際交流や検定試験などへの興味はかなり高いものであることも判明した。興味を行動に結びつける努力が教員の側に求められる。加えて、白金校舎での授業の多い3、4年生向けにスキルアップの場を設けてほしいという要望もあった。実現すれば、就職活動の中で中国語を勉強する必要性を感じた学生をサポートすることもできるだろう。この点については、e-learningシステムの開発も視野に入れておきたい。

第三に、中国語各科目の教育目標に明確にすること、教員間で教科書の選定を含めた適切な連携を行うことなどの必要性について、今後、認識を共有し共に取り組んでいくことが求められる。

今後は、本プロジェクトの成果報告において改革改善の方向性を提示しながら、より充実した教育プログラム案を企画し、一定の中国語能力を備えた学生を輩出できるシステムを作り上げられるよう引き続き取り組んでいきたい。以上

EFL(外国語としての英語)教育としての 留学生科目(I群科目)の可能性

北村 文・Peter Thornton
教養教育センター

高松 麻里・徳弘 洋子
明治学院大学非常勤講師

1. プロジェクトの主旨

本プロジェクトは、外国語／第二言語教育の分野において活用されるコンテンツ・ベースの教授法について理論的・実践的考察を行うものである。基礎レベルを習得した学習者が、対象言語を用いて新たな分野について学ぶというこの方法においては、「言語」と「内容」を両輪とした知的活動が促され、より高度な言語能力の獲得が目指される。この意味において、明治学院大学共通科目で提供されている「I群科目」は、日本人英語学習者にとって、まさにコンテンツ・ベースの環境をなしている。なぜなら彼ら彼女らは留学生を主な対象とする授業に加わり、英語という「言語」と日本の文化や社会といった「内容」に同時に挑戦することになるからである。本プロジェクトは、この「I群科目」を担当する教員4名が、学内の事例を詳察し本学英語教育の向上を図るとともに、その成果をもって外国語／第二言語教育一般への貢献を目指すものである。

2. 活動内容

2.1. 研究活動

以上の目的に即して、本プロジェクトでは第一に、関連分野における理論的背景について理解を深めることに努めた。具体的には、応用言語学、第二言語習得理論、バイリンガル教育研究などの調査研究をメンバーがそれぞれに涉猟し、またその成果を共有するための研究会を、4月、6月、7月、10月および12月に計5回行った。

あわせて、2009年7月27日には、当該分野の専門家を招いた研修会を開催した。白井芳子氏(獨協大学国際教養学部准教授)による講演「CBLT(Content-based Language Teaching)」においては、本プロジェクトが焦点を当てる教授法の理論的背景から実践例までが幅広く紹介され、また、その後の質疑応答では、日本の大学におけるコンテンツ・ベース教授法の活用状況などについても知見を得ることができた。

2.2. 調査活動

これと並行して、本プロジェクトでは「I群科目」をひとつのケーススタディとして捉えるため、当該科目履修学生に対するインタビュー調査も行った。2009年度春学期の終了時に、調査協力の申し出があった7名の学生に対し、彼ら彼女らが「I群科目」を履修した理由や実際の教室での経験、そして要望などを質問した。

このインタビュー調査はきわめて限定的なサンプルに基づくものであるため、その結果はいかなるレベルにおいても一般化できるものではない。しかしいっぽうで、少なくともインタビューに応じた学生たちは「I群科目」の履修に多くの困難を感じていた。英語に自信がなくて、あるいはクラスメートたちの発言が理解できなくて、ディスカッションに参加できない、といった感想からは、まさに「泳がねば沈む(swim or sink)」という過酷な状況で「言語」と「内容」の双方にもがく日本人履修生たちの姿が浮かびあがってきた。

しかし同時に、インタビュー対象者たちは「I 群科目」での経験に達成感を見いだしてもいた。直接的な英語力向上や専門的な内容の習得だけではなく、留学生との交流や意見交換から得るものも大きかったという学生もあり、「I 群科目」が今後の意欲的・積極的な英語学習への動機づけになると同時に、彼ら彼女らが今後も経験するであろう国際的場面や異文化交流に対する心構えを培う契機ともなっていることがうかがわれた。

3. プロジェクトの成果

本プロジェクトの成果は、ふたつのかたちで公表した。第一には、2009年9月6日にJapan Association of College English Teachers (JACET) 第48回全国大会(於北海学園大学)の支部特別企画「変わる大学英語」において、北村が「コミュニケーションな英語教育の段階的發展: 明治学院大学教養教育センターの取り組み」をポスター発表した。ここでは、本学EFLプログラムの全体像について述べたが、なかでも「I 群科目」における実践について多くの質問が寄せられ、コンテンツ・ベース教育への関心の高さを痛感することとなった。

第二に、上記の理論的・経験的研究内容を論文「内容を基盤とした教授法(CBI)実践としてのI 群科目——理念、実態、そして可能性」(『カルチュラル』第4号、印刷中)にまとめた。このなかでは、コンテンツ・ベース教授法の理論、ケーススタディとしての「I 群科目」の実情に加えて、より効果的なプログラム運営のための提言も行った。「言語」においても「内容」においても高レベルなものとなる「I 群科目」への橋渡しとして、English for Academic Purposes (EAP) に特化した授業の必要性があること、また、「I 群科目」の内部でも言語的配慮を行えるように、担当教員に対してワークショップを開くことなどが挙げられる。

4. 今後の展望

本プロジェクトは、コンテンツ・ベース教授法のなかでも、英語のネイティブスピーカーとともに大学レベルの専門的内容を学ぶという高度な授業形態を扱うものであった。ある程度の英語力を擁し、また、ディスカッションやプレゼンテーションにも積極的な学生であればそこでの経験を糧にさらに前進していくことは容易だろう。しかしいっぽうで、履修者のなかにはそうしたレベルにまだ到達しておらず、苦勞を口にする者もいたことから、そして、学生のなかには「英語力を伸ばしたい」さらには「留学生と交流したい」といった主観的ニーズも存在していたことから、異なるレベルと形態でのコンテンツ・ベース教授の可能性も探る必要がある。北村、ソーントンが「意味内容にもとづく言語習得の可能性——コミュニケーションな英語教育のために」(『カルチュラル』第3巻第1号、2009年)において論じたように、明治学院大学共通科目のなかには2年次以降の選択科目「英語研究」で、幅広いトピックについて英語で学ぶという授業も展開されている。今後はこうした中間層に焦点を当てた調査研究を行っていく必要がある。



研究所概要

研究所活動

研究プロジェクト

研究業績

研究業績



猪瀬 浩平

【論文】

「マツリのようなたたかい:1988年埼玉県庁知事室占拠事件における「存在の現れ」の政治」、『日本ボランティア学会 2009年度学会誌』:16-28頁

【学会発表】

「GO WEST:大学におけるある異交通の試み」日本ボランティア学会2009年度研究大会(龍神行政局・和歌山大学)、2009年6月27日-28日

「排除／盗難からの奪還:2006年 見沼田んぼ福祉農園盗難事件に見る場の創発」、「東アジアにおけるストリーートの現在」研究会(関西学院大学)、2009年7月24日

上野 寛子

【著書】

財団法人日本野鳥の会編集『豊田の生きものたち—生物多様性を知る—』豊田市環境部環境政策課、2009年4月

- ・ 第1章 里山にすむ生きものたち ~豊田市自然観察の森から~ 「ナゴヤダルマガエルの棲む水田環境とは」pp.30-31
- ・ 第2章 追いつめられた生きものたち ~豊田の希少生物~ 「地下で命をつなぐタゴガエル」pp.132-133
- ・ 第3章 異郷の地でしたたかに ~豊田の外来生物たち~ 「悲運のウシガエル」pp.220-221

【論文】

“Molecular cloning of novel cytochrome P450 1A genes from nine Japanese amphibian species” (共著) *The Journal of Veterinary Medical Science* 71(10): pp.1407-1411、2009年10月

【学会発表】

「カエルツボカビ(*Batrachochytrium dendrobatidis*)の日本在来両生類へのリスク評価のための感染実験」第147回日本獣医学会学術集会(栃木県総合文化センター、栃木県自治会館)、2009年4月

「純培養カエルツボカビを用いたヌマガエルに対する感染実験」日本爬虫両棲類学会第48

回大会(天理大学)、2009年11月

「カエルツボカビは結局ヌマガエルを致死させるのだろうか？」第8回爬虫類・両生類の臨床と病理のための研究会(麻布大学)、2009年11月

「多環芳香族炭化水素類(PAHs)に対する両棲類の異物代謝機構の解明:両棲類で見られた第Ⅱ相抱合反応の特徴と種差」第149回日本獣医学会学術集会(日本獣医生命科学大学)、2010年3月

【講演】

「遺伝子組換え作物を考える」明治学院大学国際平和研究所公開研究会、2009年5月27日

川島 建太郎

【論文】

Autobiographie und Photographie nach 1900 — Proust, Benjamin, Brinkmann, Barthes, Sebald
 博士論文(ボーフム大学文学部)、2009年7月

「ミミクリーの美学—ベンヤミンの自伝的テキスト『ムンメレーレン』と『蝶を追う』について」『思想』No.1030、2010年2月

【講演】

Ein Bild der Kontrollgesellschaft — Über Kinji Fukasakus *Battle Royale*
 15th International Bremen Film Conference: Public Enemies — Film between Identity Formation and Control. Jan. 21-24, 2010.

北村 文

【論文】

「内容を基盤とした英語教育(CBI)としてのI群科目——理念、実態、そして可能性」(ピーター・ソントン、高松麻里、徳弘洋子との共著)『カルチュラル』第4巻(印刷中)

【学会報告】

“Venturing into/through Language: Japanese Women and English as Capital.” International Society for Language Studies 2009 Conference (Orlando, Florida). June 13, 2009

「<英語>をめぐる女女格差と女女断絶」2009年度日本女性学会大会(御茶の水大学)、2009年6月27日

「コミュニケーションな英語教育の段階的發展——明治学院大学教養教育センターの試み」Japan Association of College English Teachers (JACET) 第48回全国大会(北海学園大学)、2009年9月6日

【エッセイ】

「拡大し、拡散し、攪乱する『かわいい』」東京文化発信プロジェクト「東京アートポイント計画」2009年10月

<http://www.bh-project.jp/artpoint/essay/091014-01.html>

「『小悪魔ageha』は宙を舞う——『キャバ嬢』と『普通の女の子』の揺らぐ境界」『最新情報知識事典イミダス』2009年11月

<http://imidas.jp/index.html>

金 珍娥

【論文】

「日本語と韓国語の文末における緩衝表現」『朝鮮学報』第213輯天理:朝鮮学会、2009年10月号(2010年1月刊行予定)

「日本語と韓国語の談話における間投詞の出現様相とその機能」『カルチュラル』第4巻(印刷中)

【講演】

「話す教育のために—談話論の観点から」、「文字と発音の指導法」第6回 韓国語教師研修会 韓国文化院主催・国際文化フォーラム共催、2009年8月6日

【シンポジウム パネラー】

「日本の韓国語教育30年を振り返って～」韓国文化院開院30周年・新庁舎移転記念フォーラム 駐日韓国大使館 韓国文化院主催・国際文化フォーラム共催、2009年11月8日

佐藤 寧

【論文】

Two Types of Tonal Feet in Japanese. 『カルチュラル』第4巻(印刷中)

【講演】

「世界を視野に考える教育のあり方～外国語教育の観点から～」
(岩手県陸前高田市教育委員会主催、2009年7月30日)

鈴木 義久

【論文】

「メルヴィルの『ビニート・セリノ』論——デラーノ船長の役割」『カルチュラル』第4巻(印刷中)

張 宏波

【論文】

「加害の語りと日中戦後和解——被害者が受け入れる反省とは何か」(共著)『PRIME』(明治学院大学国際平和研究所)第30号、2009年10月、pp.91-103

「日本の戦争責任と繰り返される『曖昧な解決』——戦争被害者の人権を考える」『人権と教育』第51号、2009年11月、pp.150-159

「東アジアの戦後和解は何に躓いてきたか——『全面解決』における『謝罪』について」(共著)『季刊戦争責任研究』第66号、2009年12月、pp.87-97、p.32

「日本のキリスト教と植民地伝道：旧満州「熱河宣教」の語られ方」(共著)『PRIME』(明治学院大学国際平和研究所)第31号、2010年3月(予定)
第二章「国民動員期の戦争協力と熱河伝道」

渡辺 祐子

【論文】

「民国初期における信教の自由と中国キリスト教会(1913-1917年)
——「孔教国教化」への対抗運動を中心に——」『キリスト教史学』第63集、2009年7月

「日本のキリスト教と植民地伝道：旧満州「熱河宣教」の語られ方」(共著)『PRIME』(明治学院大学国際平和研究所)第31号、2010年3月(予定)
第一章「満州プロテスタント史における東亜伝道会と熱河伝道」

【学会発表】

“On the Chinese YMCA in Tokyo: Christianity and China-Japan Relations, 1898-1907”
The 7th International Conference of North East Asia Council of Studies of History of Christianity(華中師範大学、湖北省武漢)2009年8月25日

「中華留日基督教青年会の成立——キリスト教教育事業から見る近代日中関係史」第4回
アジア教育学会(専修大学)2009年11月3日

【講演】

「日中基督教関係史之可能性」杭州師範大学(浙江省)2009年8月30日



研究背景

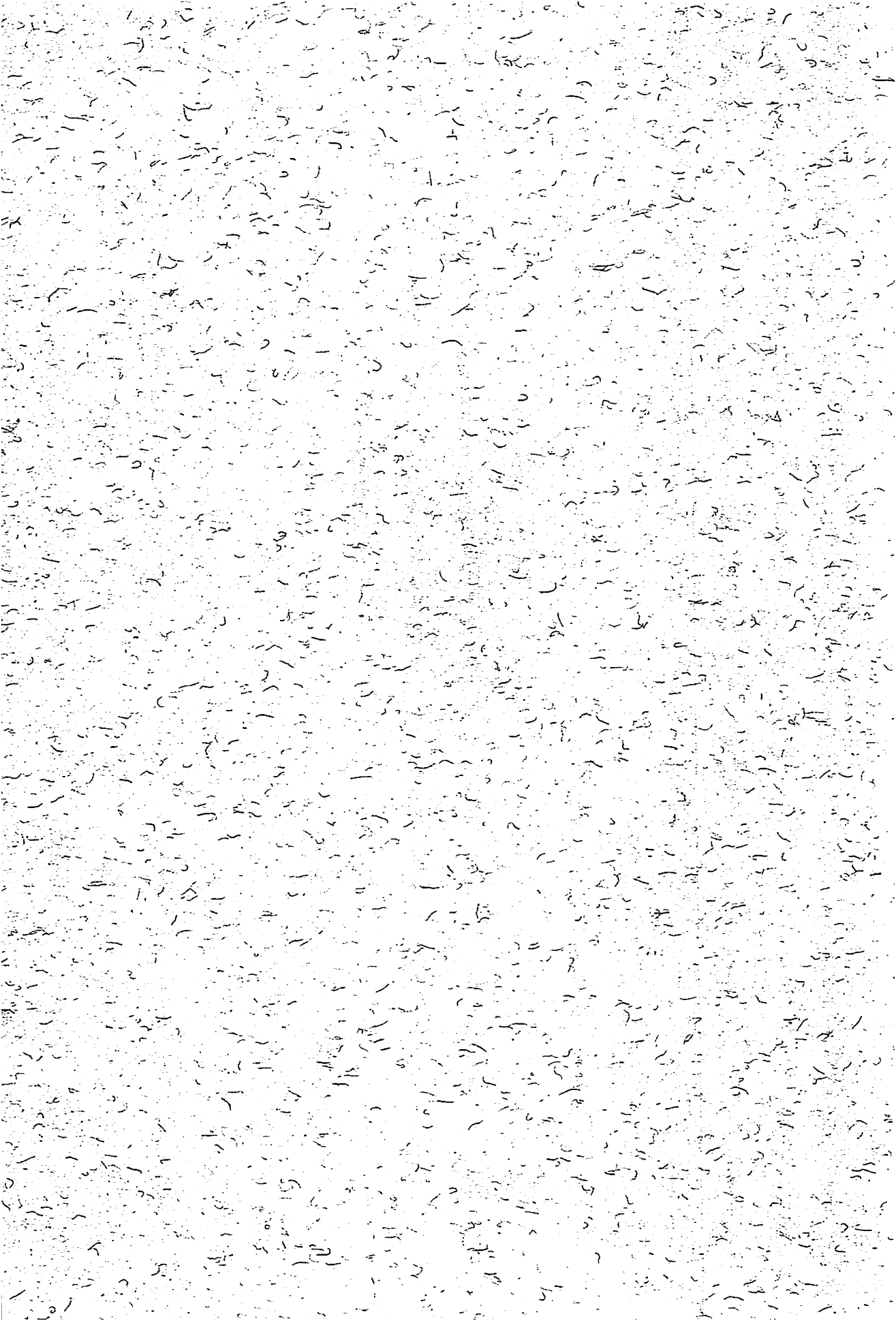
研究動機

研究目的

研究業績

明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報
SYNTHESIS 2009
2010年3月31日発行

編集代表	高桑 光徳
発行者	佐藤 寧
挿画	土方 淳代
発行	明治学院大学 教養教育センター附属研究所 〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町 1518 電話 045-863-2067
印刷	株式会社アイガー 東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー39階





明治学院大学
教養教育センター附属研究所年報

SYNTHESIS 2009